

ひとの健やかでこころ豊かな未来を実現するために

ひと・健康・未来

vol. **32**

2022. 11

特集 座談会シリーズ ポストコロナにどのような未来を築くか 第2回

『触る』を取り戻す

広瀬 浩二郎 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター 准教授

辰巳 明久 京都市立芸術大学 美術学部・美術研究科 ビジュアルデザイン研究室 教授

桑田 知明 京都市立芸術大学 美術学部 非常勤講師（同校博士課程在籍）

スペシャルインタビュー

さもないことに手間暇をかける

栗原 はるみ 料理家

第51回 未来研究会

日本の少子化問題 —課題と解決策—

柴田 悠 京都大学大学院 人間・環境学研究科 准教授



ひと・健康・未来

第32号 2022年11月発行

発行 公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団
〒604-8171 京都市中京区烏丸通御池下ル虎屋町 566-1
井門明治安田生命ビル 6F
TEL & FAX 075-212-1854

印刷所 株式会社あおぞら印刷
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町 15
TEL 075-813-3350 FAX 075-813-3331

公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団では、ホームページを運営し事業の広報活動を展開しています。研究助成公募や市民公開講座に関する内容はホームページをご確認ください。

ホームページアドレス

<https://www.jnhf.or.jp/>



04

特集

座談会シリーズ
ポストコロナにどのような未来を築くか 第2回

『触る』を取り戻す

国立民族学博物館 学術資源研究開発センター 准教授

広瀬 浩二郎

京都市立芸術大学 美術学部・美術研究科 ビジュアルデザイン研究室 教授

辰巳 明久

京都市立芸術大学 美術学部 非常勤講師（同校博士課程在籍）

桑田 知明

16

スペシャルインタビュー

さもないことに手間暇をかける

料理家

栗原 はるみ

26

未来研究会

日本の少子化問題——課題と解決策——

京都大学大学院 人間・環境学研究科 准教授

柴田 悠

32

研究助成

2022年度 研究助成採用結果

33

研究助成

2023年度 研究助成の募集

34

コラム

ひとと健康と未来と——財団の窓から—— 第1回 パンデミックを超えて

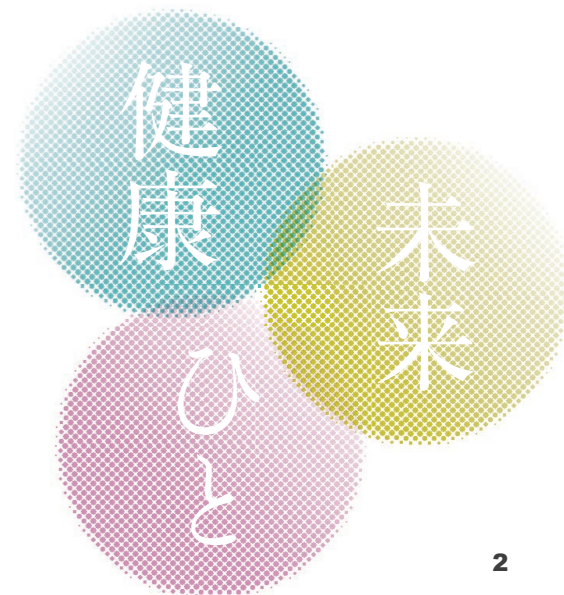
公益財団法人ひと・健康・未来研究財団 理事長
京都大学名誉教授・滋賀医科大学名誉教授

塩田 浩平

35

インフォメーション・編集後記

シンポジウム京都のご案内



表紙について

特集をテーマに、京都市立芸術大学大学院の皆さんに描いていただいています。



〈作者からのコメント〉

桑田 知明 さん

京都市立芸術大学 美術学部 非常勤講師

座談会のテーマである「さわるをとりもどす」という短文をあえて可読性の低い平仮名で表記した作品です。

監修／辰巳 明久 教授

座談会の記事を読まれた方が、見ることと触ることで得られる認識について、再度考察していただく機会となる作品です。

『触る』を取り戻す

ひろせ こうじろう
国立民族学博物館学術資源開発センター准教授

たつみ あきひさ
辰巳 明久
京都市立芸術大学 美術学部・美術研究科 ビジュアルデザイン研究室 教授

くわた ちあき
桑田 知明
京都市立芸術大学 美術学部 非常勤講師 (同校博士課程在籍)



国立民族学博物館／探求ひろば「世界をさわる―感じて拡がる」2022年7月4日

触る展覧会

辰巳 コロナの前に広瀬先生が企画された特別展、それがコロナによって延びて、丸1年ですか。去年やっと開催されて、多くの入場者が来られましたね。桑田さんの作品、いろんな方々の作品、うちの学生の作品も含めてですが、それらを見て、非常に感銘を受けました。実際、来場者数はいかがでしたか。

広瀬 当初は2020年開催の予定でしたが、結局、2021年9月から11月までやりました。全くコロナがない頃に計画を立て始めて、かなり強気というか楽観的というか、珍しい展覧会なので10万人ぐらいは来てほしいと。本音は、まあ5万人くらいと思っていただけです。結果は2万7000人なので、目標からするとかなり少ない。9月は緊急事態宣言が出て、9月末にやっと解除されて、10月が様子見、その後、世間もふわふわと緩んで、11月の1カ月間はすごくたくさん来てくれました。ぜひいたく言えば、この調子でもうちよつとやれたらと思いましたが、盛り上がりすぎて終われたのが良かったですね。来館者アンケートはとても好評で、よくぞコロナの時期に、こういう触るって展覧会やってくれた。日常生活の中で非接触っていわれて、触ることを忘れてかけているときに、やっぱり触るって大事だよなって思い出させてくれたって。数字的にはちょっと残念な部分もありましたけども、社会的な意義はあったんだなと思っっています。

辰巳 企画段階では、濃厚接触っていう言葉とか、触れたらアルコールで拭くとか、想像もできなかった。今回

の特別展、何かいみじくもコロナによって、意義が更に深くなった、そんな結果になったと思いますが、桑田さんは、出品された感想はいかがですか。

桑田 触れないのが今までのミュージアムの持っている条件や環境だったのが、ミュージアムの中の作品や資料の展示のあり方、また作品や資料の作者や館内での意識をどう変革していくのが、ユニバーサル・ミュージアムの意義です。コロナの影響で、触ることについて社会の意識が多様に向いたのは衝撃でした。ただ、私の今回出展した作品は、コロナ禍以前に制作したものであり、そういった中で触れてもらうという考えでは作っていませんでした。鑑賞される方にどう捉えてもらえるのか、作ったときに意図した内容とは違うところはどういったリアクションが起きるのかなって期待をしていました。

辰巳 アートは自由に作っていいということがアーティストの絶対的な前提条件になっていて、その結果、暗眼者であるアーティストは、自分の感性で作るのですが、制作時に触常者を全く意識してないアーティストが大半という気がするのです。こういう批評をすると、バッシングが飛んでくるかもしれないけど(笑)。京都芸大でのタクトイル(触って伝える)のデザインを、広瀬先生、桑田さんにご参加いただいたのは、見えない人に向けて、僕たちデザイナーも、視覚に障害がある方々に何のデザインもできてないんじゃないかっていう問題意識があるわけです。

桑田 アーティストの皆さんは、作品をどう感じてもらいたいっていうよりは、自分の思いはこうだという前提をふまえて制作をされていますよね。そういう意味では、

自分を前提とした作品作りをされているので、そこに新しく、触ることに対しての意識が今回加わったことで、作品を触れるようにするのはなく、触ることを作品に取り入れられていたように思います。

辰巳 今回の特別展に出品されたアーティストの皆さんは問題意識が高くて、そういうアーティストがいるってことが、ユニバーサル・ミュージアムというものを広げていくきっかけになると思っっています。



「特別展」ユニバーサル・ミュージアム 入口
提供：国立民族学博物館

広瀬 すごくよかったなと思うのは、芸大の学生さんに、触る名画っていうことで、伝えたい名画を選んでもらい、2次元の作品を2・5次元、あるいは3次元の立体にすることによって、視覚障害のある人も絵画の世界に触れてもらいました。基本、絵画は見えてる人が見えてる人のために描くものですから、そこで見えない人にも絵画を伝えるなんて、画家には全く念頭になかった。それを何十年何百年後に生まれた芸大生やデザイナーが、視覚芸術の再解釈っていう、名画の世界に入り込んで、じゃあ、この名画を立体、半立体で伝えるにはどういう工夫をすればいいのかって考えて、再創造、再解釈し新しいものとして展開してくれた。きっかけは視覚障害の人に絵画を伝えることなんですけど、結果としてそこを突き抜けて、本当に視覚芸術の新たな見方を提示してくれた。

辰巳 アート分野にいる人たちの新しい気づきっていうか、それにつながったらいなと思いますし、実際、作品も面白かった。触る絵画だけでなく、ほかにも非常に示唆的な、あるいは次のクリエイティブを促してくれるような作品が多かったなという気がします。

広瀬 学生の作品だとぼつと見て、ああ、ゴッホだってわかりますが、桑田さんの作品は、半分冗談半分本気で、意地悪な作品がよく言ってたんです。来館者が、参加型の作品というか、手を動かして自分で考えて、こういうふうにするのかな、あ、できた、みたいなことで。だから、あの作品を本気で解読しようとしたら半日ぐらいかかる。ぼつと見てわかるのと、じっくり考える作品。そういういろんなタイプの作品が並べられて、特に桑田さんの絵本のコーナーがすごく充実してたなと。

桑田 例えば、視覚で鑑賞せず視覚情報を主とした作品を鑑賞する方法に、対話での鑑賞や、作品の状況を色や形の要素ごとに解体し示したものを使って、順に把握し頭の中で組み立て理解するというものがあります。この誰かと鑑賞する際に起こりがちなと思うのは、自分のペースを守って鑑賞できないことだと思ってるんですけど、今回京都芸大の学生さんの作品を見ると、自分たち



国立民族学博物館 大演習室

「特別展」ユニバーサル・ミュージアム 会場の様子

(下) さわれないものをさわる—ポップアップ絵本
／桑田 千明
提供：国立民族学博物館



特別展の記録はホームページからご覧になれます。 https://www.minpaku.ac.jp/ai1ec_event/16854

がまず名画に対して、どう感じて何に一番インパクトがあったのかというのを全面に出していたことで、鑑賞者は作品から何を共有できるのかすごくわかりやすかった。そういう鑑賞時間というのはすごく新しいというか、当然のように考えにくい体験が形となっていて、すごく感動しました。

触れることで伝わる

辰巳 見るだけだったら、絵の前を通り過ぎていくだけになるけど、今回の展覧会は、触るってことで作品との距離が変わってしまうし、触るといって行為で実際体も動くわけですよ。触ることを許容する展覧会というのは、それだけで参加の仕方が変わり、参加度が上がっている、物理的な距離が近くなることで、作品との心理的な距離も近づいていると捉えることができるかと思えます。

広瀬 これ本当になんか言葉ですけど、「ふれあい」って言葉があって、コロナになって、非接触っていうことが言われて、もちろん感染予防ってことで3密を避ける、それは大切なことですけど、一方で人間の文化、コミュニケーションっていうのは、やっぱり対面。もちろんオンラインのメリットはありますが、本来の人間のコミュニケーションは「ふれあい」、実際に場を共有することですけど、それがコロナになってできなくなりました。

よりによってコロナ禍の真っ最中に、触る展覧会を開催することになって、単にモノに触れてよかったじゃないかって、物理的にモノとの距離が近くなったように、人と人の距離も近くなるんですよ。触ると体を動かすことで脳も活性化され、そして話したくなる。「つるつるして

気持ちいいよ、触ってごらん」とか。だから、自然発生的に知らない来館者同士の対話が生まれるし、親子で来ていて、ちょっと反抗期であんまり家でしゃべらない子だったんだけど、今日は久しぶりにすごくお子さんがしゃべって、楽しい時間ができましたって。

本当にモノとの距離、人との距離が縮まっていく。非接触、もちろん大事ですけど、やっぱり人間は触れ合いたいといけないうことを確認してもらえたのは、意味があったのかなと。

辰巳 学生の作品に対してのアドバイスをするときも、対面の比率が圧倒的に高くなっています。オンラインでのよさも確かにありますが、対面だから伝わるってこと結構あって、その子がどれくらい確証を持っているのか、どこか戸惑ってないか、実は違うこと考えてる？みたいなことは、しぐさやちょっとした態度など、対面のほうが情報が多くてわかりやすい、オンラインでは代わりの利かない部分がありますね。

広瀬 中央大学で2年続けて博物館教育論の授業をやったんですね。去年はオンライン、今年は対面でやりました。オンラインだと、東京への移動がなく、大阪の家からしゃべれるので時間の節約になるし、気分的にも楽です。ただ、視覚障害者ですから、家でパソコンに向かってしゃべっていても画面が全く見えない、宙に向かってだんだん不安になってくる。べらべらとしゃべるけど、気が乗ってないみたいなの。

今年、対面になって、見えないのに一緒にやらないですかって言われますけど、やっぱり違うんですよ。教室でしゃべってるとき、学生の姿は見えないけど、紙をめく

る音だったり、椅子がきしむ音だったり。学生が黙っていても、何か聞いてくれてるなって、文字どおり気配です。ね、気づいてというのが感じられて、そういうものが見えないなりにというか、見えないからこそ感じる部分があると思います。おやじギャグとか言ってもしらーつとしていますが、それはそれで、何か乗って聞いてくれてるみたいなのをすごく感じて、こっちもいい気分になって、だんだん乗ってくるみたい。授業の感想コメントを見ても、やっぱり断然対面のほうが反応いいです。

辰巳 京都芸大の作曲の先生がおっしゃるには、音楽って今、通信ネットワークを使って簡単に再生できて、ヘッドフォンやイヤホンで聴ける。音楽ってそういうものだって認識してる人が非常に多いけども、やっぱりライブで、音の振動であつたりとか、ミュージシャンの体が動いてる気配、それら全部を感じながら聴くのが音楽の本来あるべき姿だと。音楽もライブで伝わってくるものは全く違うということです。

桑田 私はコロナが落ち着いた頃を見計らってライブに行ってますが（笑）、会場に行くまでの時間、会場に着いて開演するまでの時間って長いじゃないですか。でも、その間に気分が高まってくる、そういう心構えってとても重要ななと思います。特別展のときにも、広瀬先生は、ゲートから会場に入ってくるころの雰囲気作りを重視されてましたし、会場の照明、スタッフの皆さんの声のトーン、案内の仕方などを大切にされてました。消毒して、さて、どんな空間にどんな作品があるのかって身構えた来場者に対して、作品への態度というか、姿勢を示せる、その時間って本当に大事だなと思います。

広瀬 消毒って何回もめんどくさい。多少自虐的に言うと、触る展示でなく、消毒ボトルの展示会かっというぐらい（笑）。消毒ボトルを置いて、あとは自主性に任せますが、消毒することで、よし、これから大切な美術作品に触るぞっていうことを肝に命ずる、一つの儀式的なものにはなったという気はしますね。あと、ユニバーサルっていうことで、視覚障害者である僕の立場が前面に出た展示会なので、触覚は手だけじゃなくて、全身に分布してるので、体で感じてもらうのを意識しました。

音に関して言うと、耳が聞こえない人は音がわからない、直接的にメロディーとかリズムを伝えることはできませんが、先ほどの、振動とか波動っていうのは当然あつて、特別展では、音に触るというセクションをつくりました。打楽器とか陶器を叩いてもらう、自分で能動的に世界に働きかけると、その陶器が震え、その振動が伝わってくる。鈍感な僕でも、ちよつと顔を近づけると、何か音とは別の空気の振動が伝わってきますし、音を肌で感じます。研究公演、パフォーマンスもやりましたけど、そこに視覚障害の人たちだけでなく、聴覚障害の人たちも少なからず来てくれて、すごくやってよかったなと思うし、いろんな可能性があつて、音楽でも新しい価値が生まれるんじゃないかなと。

辰巳 調剤薬局チェーンで、聴覚障害の子どもたちを放課後に預かるスクールをやっておられるところがあります。聴覚障害のお子さんが来て、聴覚療士の方が勉強を教えたり、一緒に遊んだり。そこのワークショップは、楽器のマラカスを作ろう、いわゆる、カシヤカシヤって両手に持って振るやつですね。そうすると、音は聞こえないんだけど、カシヤカシヤという触覚は伝わってくる、これ見事なワークショップです。デザインを

辰巳 そうなんです。もともとフランスの大学の先生との雑談中に、視覚障害を持つてる人を対象に、タクタイルデザインをテーマにしたらいんじゃないかってことが出てきて始まりました。視覚に障害がある人と何かコミュニケーションできるものを考えていたら、そこいらいろんな気づきがあつて、自分の世界に対する認識が広がっていく面白さがあつて、止められなくなつた。わかつていくことがわかつてくる面白さ、自分が知らない世界観が開けてくる、ああ、こんな感じ方があるんだみたいなね。教えられることばかりです。学生たちには、今まで気がつかなかつたことに気づいてもらう大きな教育機会なのです。それは福祉の教育ではなく、世界に対する認識を拡げていくこと、学生が自分自身の認識の狭さに気がついていく、そこが一番意義があると思つています。



広瀬 浩二郎

国立民族学博物館准教授。自称「座頭市流フィールドワーカー」、または「琵琶を持たない琵琶法師」。1967年、東京都生まれ。13歳の時に失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000年、同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、文化人類学。「ユニバーサル・ミュージアム」（誰もが楽しめる博物館）の実践的研究に取り組み、「触」をテーマとする各種イベントを全国で企画・実施している。最新刊の『世界はさわらないとわからない』（平凡社新書）など、著書多数。

桑田 私は、2014年に京都芸大の辰巳先生の研究室を一度卒業しましたが、その後、院生として再び入学し、辰巳先生のタクタイルの授業を受けました。授業の中で、一番印象的だったのは、誰かのための何かでは全くなくて、自分のために制作をするといういうこと。学生の時はその意味を十分に理解できてなかつたんですけど、自分が考えてることを自分の発見のために形にする時間楽しくて、一生懸命取り組んでいました。卒業し就職すると、誰かのための問題を解決するという意識になつてくる。でも、自分に何ができるか考えていくと、取り組むことが自分のための時間にもなるように思えてすよね。私自身の体験を通して考えると、京都芸大の学生さんたちも自分の出発点がどこからきてるのか、いずれ気づくときがくるんじゃないかと思えます。



桑田 知明

グラフィックデザイナー。京都市立芸術大学ビジュアルデザイン専攻非常勤講師。視覚と触覚が相互補完・相互作用する手法の研究を行なっている。視覚優位の分野に、触ることを加えた可能性を広げたいと活動中。触るポップアップカード作りなどのワークショップも行なっている。『ユニバーサル・ミュージアム——さわる！“触”の大博覧会』の会場ビジュアル担当。
www.chiakikuwa.com/

やつてる人間として、大変勉強になった事例です。

表現の可能性

広瀬 視覚障害の人に絵画を伝えるとか、聴覚障害の人のために音楽を伝えるとか、いわゆる特別支援教育、盲学校の場であつたり、ろう学校の場で、いろいろ実践されてますが、それって福祉的な発想で、ややもすると、上から目線で、健常者が不自由な人たちに教えてあげますよって。そういうスタンスになりがちなんだけど、そ

辰巳 アート系の人間は、描きたいとか、もの作りが面白いから始めたと思うんですよ。これはもう人間誰しもそう、ものを作ることは、人が生きていく上で非常に大きな中心にあることだと。自分のためにやり始めたもの作りは、同時に他者に対して何かを与える結果となります。絵であつても好きで描き始めたけど、鑑賞してくれる人を意識したときに、どうすればいいのかという社会性を帯びた問いかけがその次にくる。自分のためと社会のためっていうものをバランスよく整合していく、そ



辰巳 明久

専門：ビジュアルコミュニケーションデザイン
京都市立芸術大学 美術学部・美術研究科 ビジュアルデザイン研究室 教授。1958年北海道生まれ。京都市立芸術大学美術学部デザイン科卒。大学卒業後数年でデザイン会社を起業。1997年京都市立芸術大学 美術学部／美術研究科 ビジュアルデザイン研究室 専任講師。2008年より現職。グッドデザイン賞などを受賞。
著書：『知の方舟』（共著）『紙-昨日・今日・明日』（共著）

れが芸術教育の中で非常に大切だと思っています。

広瀬 芸大に時々、招聘講師としてお招きいただいて、この人にも伝わらないといけないなっていうことを意識する対象に僕がなってる、見えない五十何歳のおっさんが学生たちの目の前にいる意味はすごく大きい、そこを十分ご理解いただいて呼んでいただいているのは、すごくありがたいと思います。

辰巳 広瀬先生からいただく問いかけの深さ、本当にありがたいです。例えば飲食店のデザインをするにしても、今流行ってる何かを作れば売れるみたいなことでは、今のデザインはだめで、もともと人はどういふふうにものを食べてきたのかってところに立ち返りながら考えていかないとけません。人が豊かになるのは、精神的に豊かになることがものすごく大切なことで、デザインするときに、民博で研究されている人類学的な視点についても大事なんですよね。だからタクタイルのデザインでも、誰でもいいわけじゃなくて、常日頃、人間という存在を深く考察しておられる方に来ていただくことに意味があるのです。

桑田 広瀬先生は覚えてないと思いますが、2017年の真冬に、みんなでご飯を食べた後、たい焼きを食べようってなりました。その時、私が広瀬先生をお店まで誘導することになったのですが、初めて一緒に歩くって、どうしたらいいのか分からなくて焦りました。でも、とにかく一度やってみないことには無知のまま、失敗するなら今のうちだと思い、広瀬先生に犠牲になっただけでした(笑)。広瀬先生に私の腕を持っていたら、寒かったこともあり、私は私の体が震

えてることに気がつきました。震えるのは仕方ないけれど、震えるときと面倒な人に感じられるなど心配しましたが(笑)、でも、そういう体から発せられている情報に初めて考えを巡らせました。そんな体験普通ではないので、今思うと良かったなと思います。広瀬先生の講義を受ける学生さんも、例えば点字を扱った作品を制作する中で、広瀬先生が点字のルールよりも学生の思いにまずは耳を傾けてくださることで、自身がまずはどう感じたのかを前提とした制作ができています。それは貴重な体験となっているはずですよ。

誰もがアートを楽しむ

広瀬 ちょっと厳しい言い方になりますけど、障害者アートという言葉の方があります。数は少なく、アウトサイダーといいますが、芸大などで学んでなくて、趣味の延長みたいなところから作品制作を始めて、それなりの評価を得てる人が、日本に、世界にもいらっしやいます。僕みたいな素人が言うのもおかしいですけど、本当にこれってアートとして評価されてるのか。いい意味でも悪い意味でも、作者が視覚障害の人であるっていうところの珍しさで注目されてる部分がある。それはある意味過渡期的なものかもしれないですけど、芸大などで教育を受けるのがすべてではない、もちろんアウトサイダーアートだっていうことの可能性も当然あるっていうことを大前提としつつも、そういう中でも、障害のあるアーティストも芸大のような場でもまれて、作品を発表していく道がもっと開けていいんじゃないかなという気がします。

桑田 私は触るワークショップの企画も行なっているものがあることには、みんな気がついていっているわけですよ。ただど一方、守破離で言っていたように、一定の型に基づいてやってくるから、達成できて最低限の基礎力が担保されることも事実なんです。この一つの尺度の体系の中に、あらゆる人が入ってくるのは無理な部分もあるわけです。

だから僕は前から、入試の制度を複数にしたほうがいいっていう話をしている、推薦入試とかも、やりようではないかなと。

いつかの誰かのために

辰巳 アートではないけど職人さんの世界、新潟の燕三条で刃物を研いでる職人さんがおられて、もう本当にすごい。恐らく僕らの感じる感じができないような微妙な磨きの技術とかがあるわけじゃないですか。その職人さんが、テレビのインタビューで、このまま研ぎながら死にたいって。すごい技術の世界で、求道者みたいな。視覚の障害がある方が、技術的な探求ができないかっていったら、そんなことはない。まさに手の触覚とかでできるわけです。

辰巳 これからはコロナと共存していくようなかたちになっていくでしょう。また一方で完全にコロナ以前の状態には戻らない気がします。海外は、なかったみたいな状態になってますけど。だけど、日本の社会の中では完全には戻らないように思っていて、今回のこういう経験をどういふふうに生かしていくのかっていうことだと思っただけです。

桑田 私自身視覚に依拠しているからこそ、視覚と触覚を対比して考えられる部分もあります。それは、コロナ禍を経験して触ることについてまだ知らなかった部分に気がつくことに何となく似ているなと思っんです。今だからこそ触ることを深めて考えられるし、なかったことにはしたくない。どう生かして、視覚と触覚について考えていくのか模索中でもあります。

辰巳 実際、ユニバーサル・ミュージアムとして広瀬先生の企画に参加させていただき、平塚の盲学校でもワークショップをやってきて、次は具体的に何かある？

桑田 私が周りの方によく不思議がられるのは、プライベートの時間を削ってまで、なぜそんなに視覚と触覚について熱中しているのかということです。現在博士課程に在学していますが、再び入学することに両親でさえも驚きました。でも、私が勝手にやりだしたことでなく、そういう時代に生きて、広瀬先生や辰巳先生という、私よりもはるかに前から考えてこられた方に出会って、その情熱にふれて続けているようなところがありま

守・破・離

広瀬 日本の芸道の言葉で「守破離」があります。守るがあつて、破るがあつて、離れるっていう三段階。職人の世界もそうですけども、伝統的な型を守っていく段階、やっぱりなかなか時間がかかる、工夫が必要なんです。ただ、それがある程度身につくと、次は破るっていう考え。自分のオリジナリティを追求していくときに、どうしても見えちゃう、先生のように作らないといけないのか、周りを見て、あつちのほうが進んでるとか。それ、いい悪い別にして、視覚障害の人はそれは入らない、そうすると自分との対話にすごく入っていきやすい部分っていうのがあると思っんです。大事なのは、最初の守るという段階のときに、見えないって場合、これってどうなるのってときに、やっぱり最低限の基礎を盲学校の美術教育がマンツーマンで教える。ある程度の基礎を学んだうえで、芸大とかで専門的にやるうっていうのが出てくると。毎年、視覚障害の人が芸大にいけるようになって、じゃあ私も、俺も受けるとかっついていって。

司法試験だって、最初は点字で受ける人がいるなんて全く想定していなかったわけですよ。それを京都の竹下さんという全盲の方が、俺は点字で司法試験受けて弁護士になりたいんだと。そこから始まったわけです。じゃあ、国家試験だし点字で問題を作らないといけない。結局、竹下さんが司法試験に挑戦されて受かって、そこから続いてたつてことがある。

辰巳 うちの入試制度なんですけど、共通試験を受けて、実技の試験を受けて、その合計点でという、それは一つの尺度でやってきたけども、それでは測りきれない



す。私一人の人生でできることは限りがあるので、学生さんや、新しい視覚デザインについて考える方に、触れることを取り入れたらどういうことができるのか考えるきっかけに私の取り組みがあれば嬉しい。何か考えていただけるような方が増えてくると、私がやっていることに、やっと思いが出てくるのかなと思うんです。いつかの、誰かのためになれば、それだけで十分だなと思っています。

辰巳 情報を伝達していくデザインをもっと積極的にやってみようということかな。

桑田 自身はグラフィックデザイナーとして、この分野にいます。今までできていない活動であると思います。一人で単品の作品を制作し完結するのではなく、デザイナーとして担当する広報物の制作で触れることを取り入れたい、イベントのデザイン物で触れることを取り入れたら、単品の作品制作で得た発見を生かしてはいきたいと思っていますね。

辰巳 誰もあまり考えずにグラフィックデザイン、イコール、ビジュアルデザインって言うところのわけ。ところが桑田さんが今やっているのは、ビジュアルアンドタクトイルデザイン、あるいはタクトイルデザインだけのときもあって、それはそれで意義深い。だから、グラフィックデザイン、イコール、ビジュアルデザインという概念を変えていってほしいと思います。具体的には、グラフィックデザイナーってというのは、タイポグラフィ（文字の書体、大きさ、配列など）とか、印刷方式の研究とか、あるいは発色がこうだとか、いわゆる目に見えるグラフィックデザインのそれぞれの技術的な面だった



り表現面を研究していくわけです。だけど、点字一つ、紙の触感一つ取っても、健常者の人たちだけが紙から得る多様性みたいなところは障害者の人に向けても研究していかなくちゃいけない。グラフィックデザインにはパッケージデザインとか、そういうのも入っているのだから、やるべきが多い。

たくさんの方に触れてほしい

辰巳 そういえば、広瀬先生、巡回展のお話が岡山でもあるんですね。

辰巳 こういう活動って本当に深く理解していただくには、焦ってもだめ。だけどそこそこ急いで、どれだけ広げていけるかなということでしょうか。舞鶴市からお話が来ましたが、それぞれの想いをしっかり受け止める機会があればどんどん増やしていけたらと思います。

出会いとつながり

辰巳 遡るとタクトイルデザインの初年度に授業を受けたのが桑田さん。桑田さんが4回生のときですね。枯葉の音を紙で再現するという作品を作っていて、結構いい線いってるなあ（笑）。でも、もつとできるのではないかと、みたいなことを言った記憶がある。

桑田 そうですね、2011年ですかね。訳もわからずやりだして。

辰巳 2012年には、二条城の横にある京都市立芸術大学のギャラリーで展覧会をやりました。僕はそれを持っていたい、だけど毎年やると学生が変に先輩から学ぶので、わざと断続的にするわけですね。それで今に至っているのですが、広瀬先生と初めてお会いしたのは、京大でのシンポジウムときですね。

桑田 そうです。2017年に辰巳先生と広瀬先生が、初めて一緒に登壇された京大でのシンポジウムでは、私もポスターを担当させていただきました。

広瀬 そうですね。いや、人の縁ってというのは不思議だ。2001年に民博に入って、最初は歴史とか人類学の研究者を目指して、2006年、2009年に展



覧会をやって、それはどちらかというと視覚障害の文化を一般の人に伝えるというか、点字の歴史とか、それ以前、目の見えない人はどうやって勉強していたか、みたいな展覧会をやりました。これは、すごく伝えていく意味もあるし、僕みたいな当事者がやらなくちゃいけないんだけど、これってやっぱりマニアックというか一般受けはしない。触るっていうのは楽しいもんだし、敷居を低くしている人々に感じてもらえたらいいなって。それで、展覧会をやる時に点字アートって言葉、最初に使いました。文字通り点で示すアート。点から線に、線から面に広がっていくみたいなイメージで。展覧会ではアーティストの方に、さわって楽しめる作品を出してい

広瀬 そうですね。昨年3カ月やって、すごく反響も大きかった一方で、コロナで行けなかった、そんな特別展あるの知らなかったみたいな声もありました。借用品が殆どの特別展なので、そのままの状態で巡回は難しいし、運搬をはじめ調整するの大変なんですけど、本当にありがたいです。岡山のテレビ局なんです。見せるメディアのテレビが、見せるだけじゃ、これからはあかんやろうっていうところで、触るってことに。それでもコロナとかウクライナ戦争の影響を少なからず受けて、ちよつと流動的ですけども、やり方を工夫してやろうって。特別展をやってみて、本当にモノの持つ力の大きさ、例えば、触らないとわからないモノ、見るだけではわからないモノがいっぱいあることが分かったんです。特別展で、耳なし芳一の作品、木彫なんですけど、あえて右手だけシリコン製にしたのを置いたんです。それを暗闇でさわると、あ、木彫だなと思って安心してたら、右手を触ったときにどきつとする、リアルな手ざわりで。それは論より証拠、百聞は一触にしかず、そこで作品が伝えられる情報のインパクトはすごくある。自分としては地道にしゃべることと書くことを続けていくわけですけど、同時に、いろんなアーティスト、デザイナーのお力を借りて展覧会を仕掛けていきたい。伝えきれない部分は、桑田さんにも来ていただいてワークショップで、直接ふれあいがらつてのを積み重ねていかないとと思っています。特別展をやつて、それなりの反響はあったと思いますけども、じゃあ世の中が変わったかというところ、じわつとした変化は与えたかもしれないですけど、急速なインパクトを与えたわけじゃない。やっぱりそれは地道に積み重ねていかなきゃいけないことだと思いますね。

ただくことを少しずつやって、知り合いも増え、2021年は、ほぼ現代アート展って言うていいようなかたちで開催できました。そういう意味じゃ、視覚障害文化っていうのを考えてた僕の路線と、辰巳先生が芸大でタクトイルを考えてたところで、最初は全然、混ざってなかったのがだんだん近づいて、それが発展して、あの意味、必然的に出会ったのかなと今思いましたね。

デザインが果たす役割

辰巳 その間にもう一つターニングポイントがあって、それは、もともと僕は、自分がやっているデザインっていうものを疑ってかかっているところがあって、これでいいのかってずっと思っているわけなんです。タクトイルも含めていろいろやっている中で、京都大学が2013年度からデザイン学を始めることになって、2013年3月に、キックオフセミナーをやりました。そこでタクトイルも確か紹介したと思います。その日、私が話を終えた後、一緒にやりたいという京大の先生方が声をかけてこられて、京大と京都芸大との様々な教育研究が始まりました。そこから広瀬先生との出会いに繋がっています。

前の話にもどりますが、僕の問題意識は、デザインっていうものが、世の中であまり役に立っていないと思っていて、特に販売促進の番犬みたいな状態になっているのが嫌で、いろんなことを考えていたわけです。そのうちのひとつ、ユーザーは見えない人ということを目指しているのも嫌だったんで、タクトイルをやるうと強く思いました。もう一つは、医療関係の先生方と知り合いになって、医療関係に全然デザイナーが入れてないと、これはお手伝いしないといかんと。この二つが並行して、

二つというか僕の意識の底では繋がっているんですけどね。広瀬先生がおっしゃるように、単独でやるべきときにはお互い単独でやっていて、何かあるタイミングで出会うときには出会えるもんやなって。不思議ですね。活動していると、あるタイミングで、何か次につながっていくことが起こるってことなんですかね。

日本の社会全体が変わりつつあることを実感しますし、僕らのデザインも随分変わってきたと思います。デザイン学ができて、デザインとはいったい何かという検証があつて、そのうえで、いったい何をすべきかってことを根源から考えていかなきゃいけないんです。例えば、いろんな障害がある方に対しての、まなざしであったり、対応は、僕らが子どもの頃に比べたら、理解しようという意識は、けた違いにあると思いますね。そういう中で、共感していただける方は結構多いと思いますし、自分がやったほうがいいなと思う活動を、しっかりとやり続けることが何か次につながるというね。僕、もうすぐ定年でお払い箱になるので、あとは桑田さん、やってください(笑)。

桑田 いつまでも助けてください(笑)。お願いします。

辰巳 とはいえ、実際にはいろいろと考えてることがあつて、これからもいろいろ活動していきます。一方で、自分が面白がつてやってみてしまっているということも忘れないようにしたいなと。ただ自分の興味のままだることによって、人を傷つけることもあるかもしれない。そこはいつも考えないといけないですが。

桑田 私は今ちょうど制作や調査を始めて10年経ちました。作品については、一つ制作すると、その作品自体が

もう一つ、最近のことで言うと、ずっとガラケーを使ってきましたが、本位ながらスマホに変えようかになって。実際、視覚障害の人も結構スマホに乗り換えて、特に若い人はかなり上手に使えるようになって。とはいももの、やはり想像していただいたらわかるように、つるつる画面ですから、決してわれわれにとつて使いやすいものではない。だから、視覚障害の人も特別なテンキーのキーボードをつないで使ったり、あと意外と僕世代ぐらいの、ちょっと生活に余裕がある人だと2台持つてる。ガラケーで通話とメール、アプリで調べるのだけスマホを使うと。使えるけども決して、使いやすいものではない。携帯壊れて買い換える直前まで、みんな使ってるから、自分もスマホに慣れたほうがいいだろうと思っただけですけど、直前で方針転換。使いにくいものを無理して使つて、言い方が適当かどうかわからないけど、健常者と同じような生活をするっていうのではありません、自分はやっぱり見えないだし、マイノリティの道を適進しよう。で、マイノリティとして発言をしていくことによって、マイノリティに何か問題提起をするっていうのが自分の役割なんだというふうに思い直して、結局、ほとんど外見はガラケーと一緒に、中身だけ4Gの回線を使うガラホに変えました。

SDGsが言われるようになり、誰一人取り残さない社会というのが言われていますが、あれ何か僕、最初からすごく違和感があつて、結局、屁理屈かもしれないけど、取り残さないって言ったときに、どうしてもそこで、じゃあ、誰が誰を取り残すの?って考えてしまったんです。悪気なく使っているのはわかるんですけど、そこにどうしても強者と弱者の関係とか、健常者と障害者、マイノリティとマイノリティ、取り残す側と取り残される側みたいな関係が見え隠れしたんです。僕がひね



問題を含んでくるので、次の作品でそれを解決して、解決した作品がまた問題を含むみたいな、どんどん連鎖して繋がっている感じで現在います。そんな中で、今は一人で作品を制作していることが多いんですけど、ほかの方と共同して何か作ることが多いんですけど、ほかの方でも、共同することで互いに意見や個性が弱まるのではなく、むしろどうやって強めていくのかを考えていて、そういつた中で何かできればなと思つています。グラフィックデザイナーとして、視覚から制作を始めてる私みたいな人間が、どこまで触覚と視覚を考えられるのかというところはこだわっていききたいですね。

くれているかもしれないけど、そこでキータイ騒動で開き直つて思つたのは、もう取り残さない社会つて言ってるんだつたら、僕はもう最後の最後まで取り残されるというふうな、やっぱりマイノリティ、取り残される側として発言をしていくというのが、展覧会も含めてです。ど役割だと。自分が何を発言していくべきかみたいなこと、もう一度考え直しながら進んでいきたいなと思つています。

自分の領域に疑問を持ち続ける

辰巳 誰も取り残さないんだつていうことですね。これはインクルーシブデザイン(あらゆる人間の背景や能力における多様性を理解し、彼らと共に課題を解決するデザイン手法)という言葉が2010年代ぐらいに流行つて、僕もその考え方がいいなと一瞬思つたんです。ところが途中で、インクルーシブデザインつて言うのをやめたんですね。それは、今、先生がおっしゃつた、誰が誰を包摂していくつていうことが、何か変?つて思つたんです。実際にはお互いが、相互的にお互いがインタラクティブ(相互作用)みたいな部分になつてたらいいんだけど、何かやっぱりメジャーな集団がマイノリティを包摂してあげるつていうような雰囲気かどうかにあるんで、それでインクルーシブデザインつていう言葉を使うのをやめたんですね。とはいももの、インクルーシブデザインつていうものの意義が全くないとは言いませんよ。だけどインクルーシブデザインつて言ってる人たちは、そこに気がつかないとちょっとまずいかなと思つています。

僕自身は、根底にあるのは、自分がやつてるデザインつていうものに対して、本当にこれでいいのかつてい

新型コロナウイルスの功罪

広瀬 コロナがやって来たときに、もう最初は紛れもなく、僕の憎き敵だと思つたわけですね。触るつてことの大切さを、それこそ民博に就職してからずっと言い続け、書き続けてきたわけです。それに対してコロナが、触るな、非接触つてことが言われて、まあ、とんでもないのがやって来たと思つたわけです。ただ、3年そのコロナとつき合つてくる中で、コロナに対する見方が変わつてきて、もしかすると、このコロナつていうのはやり方は違うけど、意外と僕と同じメッセージを伝えようとしてるんじゃないかって。僕は正攻法というか、触るつて楽しいでしょ、豊かな可能性があるでしょみたいなのを、桑田さんをはじめいろんな人に協力してもらいながら作品を集めたりしてます。コロナは逆に、ある意味人類に対するショック療法というか、もう全く非接触で触れないようにして、そこで人類に問いかけてきたと。「お前たち、本当にこのままでいいのか。人類は、触れるとか、触れ合つてことを大切にしてきたのに、本当にこのまま非接触でいいのか」つて。それはほぼ、僕と真逆のやり方、ショック療法ではあるんだけど、実はその根底には、触るつてことを忘れちゃいけないんじゃないかってことを問いかけてる、そういうふうな途中から考えるようになりました。大きな流れとしてコロナ禍はだんだん去つていくと思つてますが、自分としては相も変わらずというか、触ることの大切さとか、そういうことを地道に訴えていく。コロナがあつて、いろいろあつたけども、マイナスだけじゃなくて、触るつてことを取り戻すきっかけにもしたいし、そうしないといけないとは思つています。

うことの間いかけはずつとやり続けることになるなと。その中で、このタクティルとか、医療系のデザインつていうのは、やらなきゃいけない、やってみたいと思えることがたくさんあるので続けていきたいですね。それで、タクティルのほうは、桑田さんが賛同してくれているので、続いていくだろうと思つています。それからアートを活かした医療関係のデザインについては考えられることがめちやくちやあつて、これもずつと続けていきたいなと思つています。



オセアニア展示エリアで記念撮影▶

▼国立民族学博物館／大阪府吹田市 万博公園内





料理家

栗原 はるみ

くりはら

さもないことに 手間暇をかける

暮らしを楽しむ

1994年に「ゆとりの空間」(レシピや暮らしのアイデアを紹介する事業)を創設された背景をお伺いできますか。

栗原 一生に一回ぐらいお店を持つてみたいなあというぐらいの気持ちで、一人でも行ける店。寂しい日とか悲しいことがあつたらうちに来てほしい、そういうコンセプトだったんです。料理だけじゃなくて、暮らしを楽しむこと。当時はテーブルセッティングとか、料理教室、フラワーアレンジメント、そういうのもやっていました。30年近く前になりますが、とても人気の店になって、あんな経験、自分の人生の中でなかなかないなと思つてます。

その時、サンデーブランチを日曜日にやってたのですが、すごい長蛇の列ができて。それを見るのはうれしかったですね。あの頃は自分で作って、出して、サーブスも自分でしていたので。今は、いろいろなことを一緒に楽しむ、10人ぐらいの小さな料理教室をやりたいとも思っているのですが、やるとなると規模が大きくなつてしまふからむずかしい。でも当時は本当に楽しい経験をしましたね。

いろんなことが考えられるような人になる

栗原さんが料理を通して伝えたいことは何ですか。

栗原 料理を作るには、まずは道具、器、テーブルセッティングと、いろんなことを考えると思ひます。おいしい料理が作れるようになったら、器にこだわりたいかな。料理っていろんなことをその人に与えてくれるもの

だと私は思つてるんですね。料理ができると友達を呼ぶ楽しみができるし、友達を呼ぶには家はきれいにしないといけないと思ひし、いろんなことを考えられるようになるんじゃないかなと思ひますけどね。

人を幸せにします

料理ができると、その波及効果でいろいろなことが広がっていくということですね。

栗原 料理は人を幸せにしますよね。お母さんが家族の好きなものを三つずつでも作れたら、家族は大喜びじゃない?元気がないときは好きなものを作るとか、私はそういうことを大切にしています。同じものを何回も何回も作ると上手になるんです(笑)。

夫の好きなポテトサラダ

栗原 実はうちの夫、ポテトサラダが大好きだったんですよ。仕事柄、ポテトサラダのレシピをたくさん持つてんです。ポテトサラダだったら何でもいいのかと思ひたら、実は彼は好きなポテトサラダがあつたんです。彼の好きなポテトサラダはマヨネーズは手作りしないとイケない、それに気がついたのはだいぶあとからで、「あ、この味が好きなんだ」って言つたら、「うん」って。男の人って案外言わないですよ(笑)。夫が好きなポテトサラダつきゅうりのピクルスも手作りしないとイケない。だから二つの手作りがそこに入るの。実はそういうひとつひとつのことで、私はものすごい鍛えられたと思ひつてます。夫は食べることにこだわるとか、それが今となるとよかつたのかなと思ひます(笑)。

だから、料理の力つてすごい、その人を変えるぐらいの勢いがあるかもしれない。

ごちそうさまが、ききたくて。

たくさんの書籍を出されていますが、愛着のある作品はありますか。

栗原 『ごちそうさまが、ききたくて。』もう一度、ごちそうさまがききたくて。(文化出版局)、この2冊ですね。この2冊が私の人生を決めたようなものです。これと同じ本はもう絶対作れない。あの若いときの新鮮な気持ち、料理が楽しくてしようがないような時代にも戻れない。ちょっとこなれてしまつたり、盛りつけも、技巧してるつもりは全くないんですけど、経験を重ねていくと、若いときとは違うじゃない?上手にはなつてる。だけど、その上手さが自分にとってどうかかっていうと、んー、っていう、何かそういう感じなの。だから、若いときにがむしやらにやつてたときの自分はよかつたなと思ひう。

あの時代はスタイリストという職業が確立されて、自分の器を選べなかつた。だからいつか自分の料理を自分の食器に盛りたいたいというのが夢で、かなつたのがこの本なの。この2冊は全部自分で手に入れた食器を使ったので、そのときの思いを今振り返ると、ちょっと熱いものがある。それが思ひのほか売れて、ベストセラーになつたので、この2冊が私の人生を決めたようなものですね。今240万部かな。ありがたいことです。

それはすごいですね。



「ごちそうさま」シリーズの1冊と、雑誌「栗原はるみ」

これまでの本を出版されたポリシーとは、何か変化しているのでしょうか。

栗原 私、こんなに早く夫が亡くなると思ってなかったんですよ。だから、「Harumi」というパーソナルマガジンが100号になったら夫とやりたいことというのを、2人で書き出していたのね。旅に行くとか、これをやって、こうやって、ついでいろいろあったのに、100号の前に逝ってしまった、私の人生が大きく変わってしまった。それでどうしようかなと思つて。でも自分の中でやり残したことがいっぱいあったんですよ。それでも一回、最後の雑誌をやれたらいいなと思つて話をしたら、出版社の方にぜひひつて言つていただけ。今は、本当にやりたいことしかやつていない。内容も自分でやりたいことを決めて。普通、雑誌つてそんな自由にやらせてくれないですよ。だから夫からもらつた時間を大事にして、あと5年は元気でいたい。それで始めたんですけど、本当にいい仲間たちに出会つて、私より若い彼らから刺激を受けることもいっぱいあつて、毎日充実しています。

とてもすてきな雑誌ですよ。写真や色合い、紙の感じまで。

栗原 この雑誌は、一緒に作つている方たちのこだわりで、いろいろ変えてるの。以前は同じ年代の方とつくていて、それはそれですごく楽しかつたんですけど、今回はみんな40代。みんなのお母さんと私の年が一緒くらいだから、仕事をしてると、私を見てご両親のことを思つたり、私も彼らを見て自分の子どものことを思つたりして、非常にバランスがいいんですよ。編集長とクリエイティブディレクターと私の3人で内容を決め

てるんですけど、人生本当に楽しくなりましたね。さびしくて落ち込んできるときに、私を支えてくれる人たちがいますよ。

ひとつひとつ丁寧にやることは、それなりに意味がある

「さもないことにひと手間かける」という表現を記事で読んだことがあるのですが、それを可能にするための心がけのようなものを伺えますか。

栗原 どんな小さいさやかなことを見逃さなかつたり、手間をかけることですね。丁寧にやること、めんどくさがらないことでしょうか。私、そこ大得意なんです(笑)。そこしかないんじゃないかなあ。

さもないことつていうと、さもないことで終わらせてしまふ人が多いですよ。でも、さもないことをひとつずつおろそかにしないで大切にしていけることが必要じゃないですかね。

例えばこの庭ですが、私、花が好きなので手入れは自分でしているけれど、夫が亡くなるまでは、ここまで毎日毎日丁寧にみるつていうほどでもなかつたのよね。それが、ひとりになってからは、本当に細かいことに気がつくようになって、ちょっとした変化が見えてくる。

クリスマスローズという花は、花としてはすごく低くて高さは出ない。でも草花もその環境に合わせていくんだつてことが、この庭にいるとわかるの。というのは、葉っぱがすごく伸びるものと一緒に植えたら、クリスマスローズも伸びた。光が欲しいから、競争するの。真冬に小さなミントが始めると、お母さんの古いミントが枯れながらも下の新芽をカバーする。そんなことを今ま

栗原 これが休息になつてくるのかしら。やつてることが休息なのかな？

以前、作家で精神科医の常木蓬生氏(はなきほうせい)にインタビューしたことがありまして、「休息は仕事の転換にあり」と仰つていました。同じことをずっとやるのではなく、掃除で身体を動かしたり、本を読んだりして頭を使つたりと、違ったことを回していけば、それが休息になる、と。

(※編集部注：機関誌「ひと・健康・未来」第27号に掲載)

栗原 そうですね。だから、片づけたり、食器を入れ替えたりするのも、自分がやりたくてやるわけで。昨日も玄関のラウンドの棚のところを全部入れ替えたんですけど、そういうのが気分転換になつてるんですよ。きつとね。

お弁当は、この小さなスペースでどうおいしくするか

お弁当は料理上手の一番の早道、という言葉を見つけたことがあります。

栗原 お弁当は、この小さなスペースの中でどうおいしくするかつていうことを表現しないといけないから、学びますよね。例えば、焼き魚と卵焼きがくついたら生臭いじゃないですか。そこをどうするかとか。それから、小さく作らないといけないですよ。大きい肉団子だつたらひとつしか入らないし。それを三つ入れるんだつたらどうやつておいしく見せるのか。それは人それぞれだと思ふんですけど、いろんなことを考えますよね。それと、すぐ作れるように50グラムのひき肉をラッ

で考えたことがあまりなくて。新芽が出てうれしい、古いのは切つてしまおう、みたいな感じだつたけど。だから、ひとつひとつ丁寧にしたりやつたりすることは、それなりに意味があるなつていうのを、今さらながらですがいろいろ学びます(笑)。

そういうささいなことを見逃さないというのは、いつぐらいからですか。お若いころからですか。

栗原 私、ソファに横になることがなくて、椅子もゆつくりかけたことがないのよ。いつも浅く腰かけているから、みんなに背もたれも使つたほうがいいよつて。別にそれは苦痛でも何でもないのだけど。でも確かにリラックスしてないのかもしれない。何でなんだろう。これから気をつけようかなと。

それが栗原さんのリラックスの形なのかもしれませんね。

栗原 そう。あと、何でも自分でやりたいんです。人の手はあまり借りたくないのよね(笑)。夫とずっと二人で住んでいたけど、今一人じゃないですか。家で同じメニューと仕事をしているのでマンネリ化しないよう、しょっちゅう家具を動かしてレイアウト替えしているの。庭も、アンブレラの下が大理石で重くて動かないから、車輪付きの台の上に乗せて。あれだと一人でもひゅつて動くのよ。大きな鉢も車輪の上に乗つて。いろいろやつてると、そういう知恵がついたりします。

じゃあ、意識的に休息を取るといふタイプではないのですかね？



プして冷凍しておきます。朝から全部計ってたら間に合わない。冷めてもおいしくするにはどうするか考えますね。一番お弁当が難しいんじゃない？

機嫌よくやると料理もおいしくできる

京都の仕出しのお弁当とか、見事ですものね。

栗原 そうそう。一個ずつ丁寧ね。お母さんもそうやって丁寧に作るから、子どもの中に親の記憶が残るんじゃない？「嫌々そうだった」とか言われても困るから、機嫌よくやりましょう（笑）。機嫌よくやると料理もおいしくできる。イイイヤやるのとは味も違うはず。

世の中、忙しい方が多いですから、そういう思いがあっても、なかなかできない人も多いでしょうね。

栗原 夫が毎晩汗をかくので、バジヤマは毎日洗ってアイロンがけをしていました。これは日常やっていたことのひとつです。何事もやると決めたら、続けることが大切だと思います。夫は私が前向きに生きていることがわかっていて、最後の手紙に感謝の気持ちを残してくれたのだと思います。

先生と恋人が一緒になった人

はるみさんにとって、夫・玲児さんはどういった存在だったのでしょうか。

栗原 ここは言いたいところですね。先生と恋人が一緒になった人です。

例えば、予約したレストランに向かう途中、別のお店へワインを一杯飲みに行ってくれるの。私、そういうことが好きなんです。「いいじゃん、夕飯に飲めば」って言われたらがっかりする。だって、夕暮れ時のその時間が楽しいのに。だから、「まあしょうがないか」って言いながらどこかに寄ってくれるのが好き。そういうところで、嫌なことがすべて帳消しになるんです。得な人よね。だって夫はややししい人なんです。ややししいのは天下一品ですね。

どういうややししさですか。

栗原 あるとき、君の炊いてるご飯がおいしくない、と急に言いだして。普通に炊いてるんですよ？一か月ぐらい言っていましたかね。彼の気持ちはどうやって変わらなくて最後は涙が出たぐらい。いつこれが終わるんだろうと思った。でも、それも試練だと思って、水の量、お米、炊飯器、土鍋、鉄鍋とか変えて、いっぱいやりましたね。負けず嫌い、とはちょっと違うんだけどそういうところがあって、最後までどうなつかいまだにわからない。もう聞きたくなかった、何で？って。私にしてみたら全然まずくない。あのとき何か嫌なことあったんじゃないですか、彼もね。今は聞いてみたいですね。何十年も前のことで忘れていたけど、そんなこともありました。夫は厳しいことは厳しい。でも、だからよかったです。夫は厳しいことは厳しい。でも、だからよかったです。というのもある。何でもおいしいおいしいって言われたら、上手にならない。

ベリーグッド・大したもんだ・誠うまい

私はどちらかというと何でもおいしいと言ってしまふので、



味覚が鈍感なのかもしれません。

栗原 そんなことはないですよ。そのほうがいいじゃない、優しく。だから私は少々なことでは驚かない。だって厳しい人がいたから。作ったものは全部彼に食べてもらいましたね。で、こんなのやめたらとか、料理家なのかと言われたり。

それで、気に入ったときは、「ベリーグッド」か、「大したもんだ」。もう一個何だっけ。名セリフがある、そう、「誠うまい」。それを言うんです。三つのうち一個だけ、彼の中ではランクがあるんじゃないかな？わからないけど（笑）ひとつしか言わない。不思議でしょ。それを支えにやりました。

亡くなってから夫のインタビューは一回やったつきりで受けないことにはしてらんです。悲しいほうにいかされちゃうから、夫の話はほとんどしたことなかったんですけど、話をするとなかなか面白い夫ですね。

幸せな方ですね。

栗原 彼が？どうだろう（笑）。「大したもんだよ」って言われると、私も頑張ったかがあるじゃない？夫は上手なんです。厳しかったり優しくったり、私を育ててたんですかね。まあ、そんなことありましたね。

料理を作ること、食べることへの執着、これはその方の育った環境にも影響されるのではないかと思うのですが。

栗原 もうそれしかないんじゃないですか。私は母親が料理が丁寧な人だったので、その丁寧さは影響されていますね。お手伝いをしなさいじゃなくて、味見をさせる



のよ、小さなときから。スプーンに入れて食べて食べて。あれがよかった気がする。だから私も味見しないとか進められないの。自分の舌を信じてやっているから。それは母親のいい教育だったと思います。

私が生まれたのは戦争が終わったばかりのころです。父も戦争に行っていたので。きちんとご飯が食べられない時代も経た親なので、自分の子どもにはちゃんとしたご飯を食べさせたい、きちんとした教育を受けさせたい、常識とかそういうものをきちんと持たせたいっていう思いがあったんじゃないでしょうか。

今の子どもって親に対してちよつと友達っぽいですがね。まあ私も子どもとそうなんですけど。すごくきちんとした親に育てられたなっていうのはありますね。豊の縁を踏んではいけなとか、いっぱいあるじゃない。それがひとつずつ、今思うと、よかったなと思っていきます。履き物を脱いでそのままにしていたら、えらい注意されますよね。怒って教育してるわけじゃなく。うちの夫も、ご飯を食べるときは、肘をつくな、足を組むなとか(笑)。

規則正しい暮らし

他者のために料理を作ることが楽しみ、というのはずばらしいことだと思います。今の日本には空腹を満たすために料理や食事を位置づける人が多いように感じることがあるのですが、どのようにしたらゆとりを取り戻すことができると思いますか。

栗原 私が思うには、彼らは大体決まった時間に起きて、決まった時間に寝るとか、朝昼晩にきちんとご飯を食べるとか、規則正しい暮らしをしていないのかもしれない。

ない。

私も、規則正しい生活、それが基本だと思います。ですが、今24時間社会なのでリズムがめちゃくちゃですよ。そういうのがいろいろな生活の乱れにつながっていると思うんです。

栗原 自分の生活のリズムを作ることじゃない？みんな一緒に7時に起きて何かしましょ、じゃなくて、その人に合った暮らしで。例えば昨日は12時に寝て、今日は7時に寝る、みたいに寝る時間がまちまちだと朝ご飯食べられないですよ。

冷蔵・冷凍庫 何が入っているか確認し、 残り物で料理

栗原 それと、冷蔵庫と冷凍庫をきちんと整理してほいすね。私は料理の仕事をしているから。冷凍庫に何が入っているか確認するとか、冷蔵庫の中をふくとか、残り物をきちんと処理するとか。やっぱり今の暮らしから一回立ち戻ったほうがいいんじゃないですかね。今の若い人は、朝ご飯を食べないとか、夜も何時に寝るかわからないとかで、まあそれはそれでいいけれど、自分の生活、仕事のルールに合わせて、ちゃんとしたほうが得をする気はしますね。

それは同感です。そういうメッセージは出してもいいと思いますね。

栗原 冷蔵庫は本当に、きちんとやってほしいですね。ちよつと見る、はだめなのよ、全部出さないと。それを

一か月に一回やるというんですよ。毎週一回は無理なら。一回やると結構無駄なものがあつたりするので、それを使って土日は料理を作るとかね。私の場合は、そういうときに限っていい料理が生まれたりする。

何かちよつとルールを持つてもいいのかなと。ルールって言っちゃうと嫌がられるけど、自分の中でできることはありますよね。冷蔵庫と冷凍庫を掃除してきれいにすると、何かあるかわかって、非常に頭がクリアになります。そして、明日の朝はこれしようとか、これで補おうとか、いろいろ頭が回るじゃない？そうすると無駄遣いしない気がする。

ご飯を冷凍するときは、ぎゅつぎゅつやってちよつとらだめ。例えば150グラムの大体の重さを自分で確認しておいて、それを軽くふわーつと四角に平らにして、600ワットで1分ちよつと。1分何秒かっていうのは、自分の電子レンジの機種にもよるので、自分で何回か練習して言っていきます。冷凍したものを冷凍する前と同じおいしさに戻せないといけない。冷凍だからまあこれくらいでしょうがないか、じゃなくて、冷凍しても冷凍する前のおいしさを食べないと、冷凍することが嫌になりますよね。でも、みんなはそれでよしとしていい。私は、その冷凍ご飯でおいしい卵かけご飯が食べられるように上手に戻してねって、いつも言う。ひとつひとつちよつとやって丁寧にやってあげば、冷凍することもきつと嫌じゃないし、それを使うこともきつと嫌じゃないと思うんですよ。だけど、何でも残ったら冷凍しておけばいいとするから、冷凍したものを食べるのかわかって思うけど、上手に冷凍すればいいんですよ。

そうですね。冷凍イコール残り物、というイメージがありませんね。



お母様から譲り受けたすり鉢

栗原 そう。冷凍してあつてもちゃんとした料理ができるような冷凍の仕方をしてほしい。そうすると暮らしが変わる気はするのよね。

ハンゲルなど、新たな勉強もされていますが、そういった挑戦は好きなのでしょうか。

栗原 ハンゲル、なかなか進まない(笑)。そうですね。やり残したことが結構あるのよね。若いときは刺繍が好きでやっていただけ、もう何十年もやってない。刺繍やりたい、イラストも勉強したい、ギターも習いたい、ハンゲルもやりたい、英語ももうちよつと勉強しなきゃ、いろいろ思いがあつて。

実は、京都も、私にとつてはちよつと特別なところなんですよね。自分らしい京都って何かと思つていて。京都を理解しないと何にも理解できない。だから京都は行けるだけ行こうかなと。私が単行本を出したら見てください。皆さんが知っている京都とは違う京都になるかもしれない。

京都にそういう思いがあるきっかけはあるのですか。

栗原 京都は取材で何回も行ってはいるんですけど、編集部が決めるところに行つての。私が年を取っているから、いいところしか連れていけないっていう感覚があるんじゃないかな？海外もそうなんですよね。例えば、韓国なら、高級焼肉店ではなくて、煙がもうもうして、ドラム缶でやるようなところに行きたいって言うんだけど、なかなかそうしてもらえないのよね。だから京都もお散歩コースみたいのをいっぱい作りたいなと思つて。普通に気楽に行けるところ、きつと楽しい通りがいつぱ



いありますよね。そういうのを、歩けるだけ歩いて、自分で探す。お店を取材しなくても、街並みがいいなと思ったら、そこを紹介したいですね。

人生を楽しむ

若い世代に伝えたいことなど、メッセージをいただけますか。

栗原 若い人は楽しく暮らしているんじゃないでしょうか。自分は悔いなく、やり残さないように、あと5年、80歳までにはやりたいなと。やりきりたい。

夫が亡くなって私があんまり泣いてるから、息子が心配しちゃうって、これからの残された人生でやりたいことを100考えてって、全部つき合ってあげるって言われて。息子も困っちゃったんでしょね。100書けるノートというのがあるんですよ、うちのお嫁さんがプレゼントしてくれて。まだ2、3ページしかやってないんですけど、それをただ書くだけじゃなくて、編集もしようとしています。例えば、私は佐野元春さんが大好きで、100のうちの一個に、「佐野さんに会いたい」というのがあって、奇跡的に本当に会えたんです。でも、ただ書くだけだったら、「佐野さんに会いたい、会えました」で終わっちゃう。それはちょっとつまんないじゃない？だから彼に会ったときの写真をそのページに貼りつけたり、好きな彼の音楽を書くとか、編集するの。そうすると子どもたちが、お母さんこんなふうに乗しんでたのか、っていうのを私がいなくなっても知りまますよね(笑)。最期に幸せな人生だったと言いたいんですね。うちの夫はそう言って逝きました。それを目指して、自分もそう言いたいですね。



情報発信をたくさんされていますが、大変ではないですか。

栗原 ちっちゃなことしかしてないんですけどね。3年間、一回も休んでない、休めない。

体がそうなってらっしゃるのかもしれないね。

栗原 そうですね。他にもいろんなことをやりますよ。ギターもやってるんだけど、ギターの音が決められないから、いちばん簡単な音をチューニングするアプリを探し出しました。面白いアプリがいっぱいありますね。

玲児さんもそういう性格ですか。

栗原 全然ですね。いろんなことをやらない。彼は本を読むのが大好きなんです。いつも読んでいました。頭がよすぎる。私と違う回線じゃない？それで、何でも一緒にやりたい人なの。夜は絶対一緒に過ごさなきゃいけない。同じテレビ、嫌でも何でも見なきゃいけない。見たくないけどっていうわけにいかない(笑)。けどものすごく優しい人なんだよね。

あと、何かいろんなことを言うんですよ。ずつと気にしていなかったんだけど、亡くなる2、3年ぐらい前から、いいこと言ってるなって、ちょっと気がついて(笑)、それでメモをするようになって、ここ(スマートフォン)に残ってるんです。ここに「忘れない」っていうのがあって。でもそれはまだ怖くて見られないんですよ。もうちょっと落ち着いたら見てみようかな。ここには玲児さんの残した歌もある。マイク真木さんと谷村新司さんに贈った詩が入っています。いろいろあるのよ、夫からの手紙もこの中に。いいですよ、うちの夫、こ

んなに思われちゃって。

いろいろな夫婦のかたちがありますね。今日は本当に楽しいひとときでした。

栗原 こちらこそありがとうございます。

〈インタビューを終えて〉

料理家・栗原はるみ氏のインタビューは、手作りのケーキを戴くことから始まった。そこには、インタビューとはいえ、美味しいものを食べ、気持ちが和んできてから始めたいという氏のおもてなしの作法が垣間見えた。さもないことに手間暇をかけることで、人生を愉しむ。亡き夫・玲児氏との関係を「先生であり恋人」と表現され、パーソナルマガジン『栗原はるみ』は、人生を愉しむための新たな挑戦に思えた。休むことを知らないのではなく、「休息は仕事の転換にあり」が身体化された結果であろう。月に一度、冷蔵庫と冷凍庫の点検をしてみたい。どのような生活世界の展開になるのか愉しみてみる。

聴き手…島中宗一(関西福祉科学大学教授)

全然年齢を感じさせないですよ、パワフルな。

栗原 元気でいたいですよね。自分の人生に負けたくないかな。夢に向かって最後まで貫いていきたいな。だから、若い人も、仕事を本当に好きでやってほしいの。私がお社の子に、楽しくやってるの？っていつも聞くのはそのせいなんです。やっぱり自分で選んだ職業、楽しく過ごしてほしいですね。ああよかったって。私は一日終わったときに、嫌なことってひとつもないの。

新しい雑誌は、今おっしゃったような栗原さんの思いがあられている印象です。そういうお気持ちで作られているのが伝わるので、読むと明るく元氣になれます。

栗原 それはうれしい。最高ですね。本当そうなの。そういう雑誌に巡り合ったこともすばらしい人生だなと思います。なかなか思いどおりにならないですね。

幸せですね。

栗原 幸せですね。若者も、そう言える人になってほしい。人生は一回しかないよって、あつという間に私みたいに年取っちゃうよって言ってるの。母もそういうことをいつも言っていました。昨日、孫が泊まって、あんなちっちゃかったのにもう小学校2年生になって。そりゃそうだ、こつちも歳を取るわけだから。それは、まあしょうがないですよ、順繰りだから。みんな平等ですからね。平等だから大事にしないと。最近一回は思う。負けそうになると、そう思って、やるしかないなって。

栗原 はるみ

Harumi Kurihara

P R O F I L E

料理家。家庭料理を中心としたアイデアあふれるレシピは、年代を問わず幅広い層から支持されている。著書は、ミリオンセラーとなった『ごちそうさまが、ききたくて。』(文化出版局)をはじめ、累計発行部数は3,100万部を超える。

2022年3月、講談社より新たなパーソナルマガジン『栗原はるみ』を創刊。レギュラーTV番組『きょうの料理』(NHK)などで活躍中。

日本の少子化問題

課題と解決策

京都市立大学大学院 人間・環境学研究所 准教授

しばた はるか
柴田 悠

「2100年」は、今の幼児（0〜5歳）の半数以上が生きているので、決して私たちに無関係な未来ではありません。今すでに当事者のいる未来です。

2100年以降の日本が、「人口減少に歯止めがかからず人材流出・人手不足・生活悪化に苦しむ社会」になるか、「子どもを産みたい気持ちが増えにくく不幸を実感できて、人口減少に歯止めがかかった持続可能な社会」になるかは、「2045年」までの政策にかかっています。どのような政策が必要なのかを、本講演では検討します。

少子化の現状、人口の推移

まずは現状についてのデータを見てみましょう。「希望の子ども数」のアンケート結果を見ると、「希望の子ども数」の平均値は、1980年代から少し減ってきてはいますが、今でも2.2人程度。国が政府統計から推計した希望出生率も1.8人です。ただ、実際の出生率

は2021年で1.3人。0.5人以上のギャップがあります。産みたいけど産めないというのが現状です。実際、子どもを増やしたいかどうかのアンケートでは（図1）、今より「増やさない」または「増やせない」という回答が、日本では多い。増やしたらきつと生活が成り立たないだろうから増やせない、というわけでしょう。日本が子どもを持ちにくい社会になっていることがうかがわれます。

他方で、日本の長期的な人口の推移を見ると（図2）、江戸時代後期あたりでは人口がおよそ3000万人強で一定でした。明治維新以降に急激に増え、今、また減ってきているわけですね。もしかすると、自然界と共生して無理なく持続可能な生活をする場合、日本列島の人口規模は3000万人強ぐらいが最適なのもかもしれません。そこまで減っていくのはありうる未来だとしても、問題は「人口が急激に減っていく」というスピードなものでしょう。これについては後述をします。

「結婚」「出産」要因のエビデンス

図3は、一連の少子化対策の議論をする上で「結婚」や「出産」に対してどういった要素が影響あるかのエビデンス（科学的根拠）を集めたものです。これらを見ると、幅広くいろんな要因があることが分かります。

基本的な要因としては、やはり経済的な豊かさや安定ですね。ただ出生に関しては、妻が低収入、つまり専業主婦やパート主婦のように、結婚後に職を離れている方に、出産が生じやすい。これは、仕事と育児を両立しづらい日本の現状を表しています。とはいえ、結婚に関しては、妻が正規雇用のほうが生じやすいという結果になっていますので、まずは雇用が安定しないとそもそも結婚は生じにくいと言えます。日本ではほぼ9割以上が結婚内での出産ですので、結婚しないと出生が生じにくいのが現状で、そういった面でも雇用の安定というのは重要です。それ以外に、親との同居・近居、経済的な部分だけではないさまざまな支援、保育、育児、あるいは労働時間、夫の育児参加、こういった問題がデータで既にわかっているところと、そういったところを総合的に見ながら少子化対策を考えていく必要があります。

とりわけ私が着目したのは、黒太線で囲った部分です。なぜかといいますと、比較的対策が打ちやすいという理由からです。経済的な支援は実施しやすく、制度的には簡便なものです。保育も、政策によって拡充することができます。夫の残業時間や通勤時間等といった労働時間も、働き方改革などによって、経済的なメリットを享受しながら対策を進めることができます。そういった比較的対策しやすい部分に着目して、少子化対策をこれまで論じてきました。

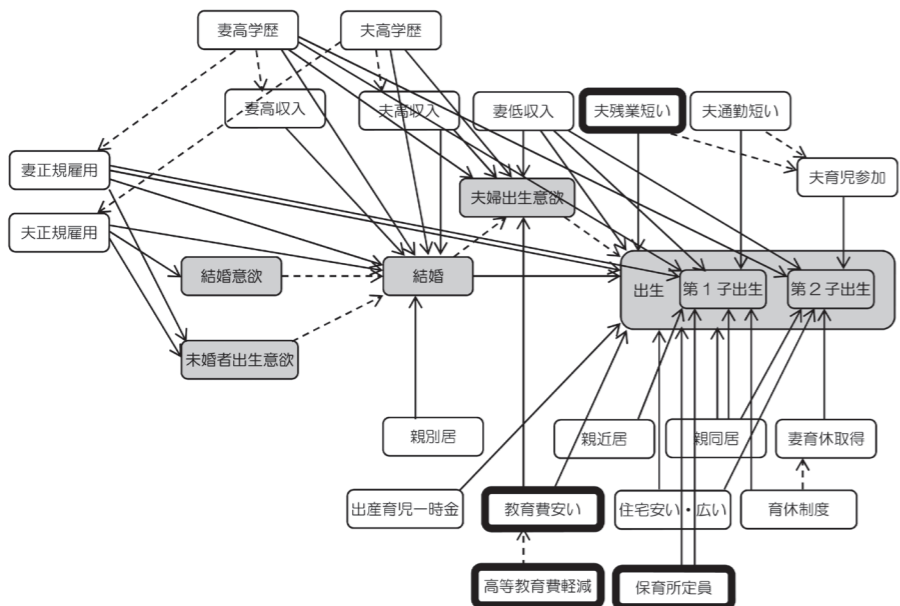


図3 日本の「結婚」「出産」要因のエビデンス

内閣府特命担当大臣（経済財政政策）主宰・有識者懇談会「選択する未来 2.0」（第2回会議）柴田悠提出資料（1）

2020年に閣議決定された「少子化社会対策大綱」には、少子化についての政府の課題認識が書かれていて、とてもバランスが取れています。ただ、そこでは比較的穏やかなことしか書かれていません。長期的に見ると、もっと厳しい事態も起こり得るのではないかと思います。

今後、労働供給の減少はもちろん予想されるわけですが、特に人手不足の産業がますます疲弊していくと考えられます。新型コロナウイルスのような新たなウイルスや細菌等も、恐らく10年に一度や二度ぐらいのペースで襲ってくるでしょう。そこでの医療・介護の逼迫というのは深刻な問題です。医療・介護の現場は、少子化が進めば進むほど逼迫します。

また、経済への影響については、恐らくこういうことがいえるのではないかと思います。日本の企業を中心マーケットは国内ですので、国内での消費がGDPの大半をもたらしています。急激に国内人口が減っていくと、将来の国内消費が減っていくと容易に予想されますので、国内への投資が減ると思われる。国内でのビジネスがやりにくくなるということです。あとは有能な人材がどんどん海外に流出していき、日本に帰ってこなくなる。研究開発のような非常に流動性の高い分野で既に起こっており、今後ますます、さまざまな分野で優秀な人ほど日本から出てしまうでしょう。つまり、人口が減るスピードが速すぎることで投資が入りにくくなり、有能な人ほど日本から出てしまうということになります。これが私の懸念する問題です。

少子化がもたらす課題

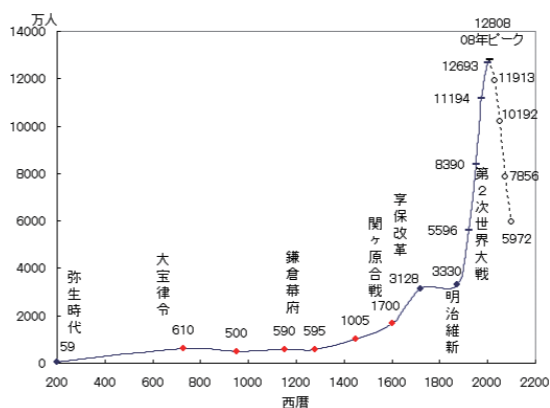


図2 日本の人口推移

本川裕「図録▽人口の超長期推移（弥生時代から2100年まで）」社会実情データ図録 2021年

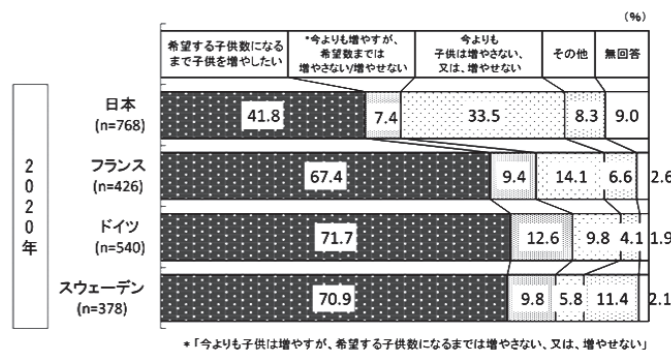


図1 「更に子供を増やしたいか」（2020年調査）

内閣府「令和2年度少子化社会に関する国際意識調査報告書」2021年

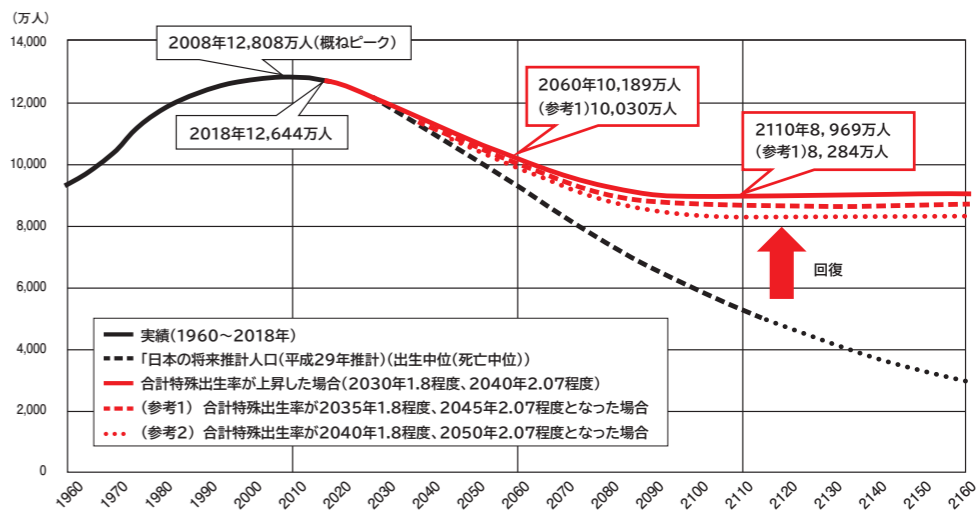


図4 日本の人口の推移と長期的な見通し

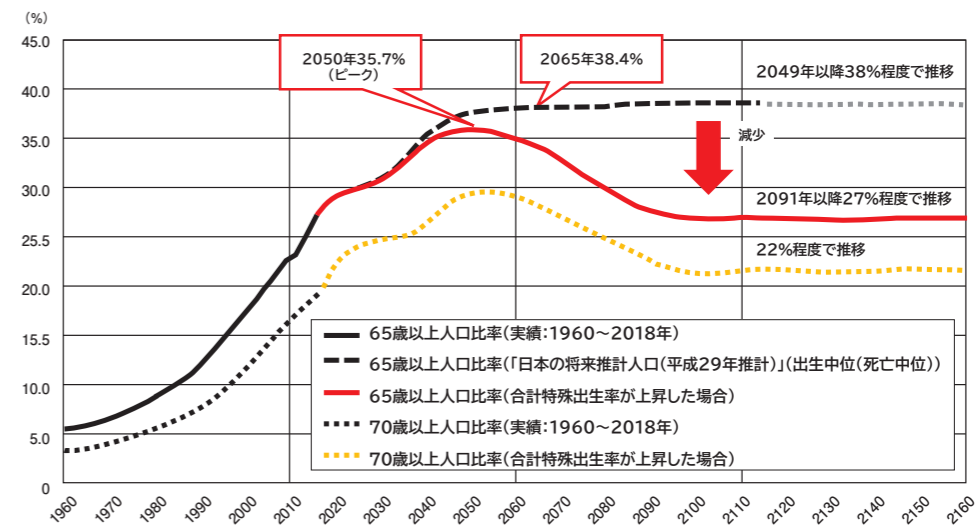


図5 日本の高齢化率の推移と長期的な見通し

図4・図5：内閣府地方創生推進事務局「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン（令和元年改訂版）」2019年12月20日 より改訂

このままいけば急激に人口は減っていくのですが、日本政府は、出生率が将来的に2・07まで上がれば人口は一定になるだろうという長期的な推計を出しています（図4）。ただ、そうなるのは2045年前後に出生率2・07になった場合であり、遅れば遅れるほど人口はますます減っていくので、政府としては早いうちにソ

フトランディングしたいようです。

図5は、その場合の高齢化率がどう推移するかというグラフです。黒の太い点線は今のままいった場合です。高齢化率4割ぐらいいで定常化し、10人に4人が65歳以上になります。もし出生率が2045年前後に2・07まで回復した場合には、赤線のように高齢化率もやがて減

選択肢A・・・良質かつ十分な保育・幼児教育

ただ、日本では保育・幼児教育の質に問題がありません。他の先進諸国と比べると、日本の保育・幼児教育の質は、0〜2歳に関しては比較的良好水準にあります。3〜5歳の保育所・認定こども園・幼稚園での、保育士や幼稚園教諭の配置基準は、先進諸国の中では最悪のレベルになっています。最近、3歳については多少改善されましたが、4〜5歳についてはまだ最悪レベルのままです。そのため、まず保育・幼児教育の質をしっかりと確保することを、大前提の必須の対策として環境整備をしたうえで、少子化対策をする必要があります。

しかし、この配置基準を改善するにはお金がかかります。そのうえで少子化対策となるとさらにお金がかかるので、まず質の改善をしたうえでの予算を計算していかないと正しい数字が見えてきません。私の試算では、保育士や幼稚園教諭の給料を全産業平均まで改善したうえで、配置基準を先進国並みにまで改善するには、合計で1・7兆円の追加予算が毎年必要になります。

保育の利用が増えることで出生率がどのくらいまで上がるのかという実証研究があります（Fukui 2017）。それによると、保育の定員を最大限にまで増やす場合、私の試算では2・9兆円ぐらいいかりますが、それでも出生率は1・71までしか上がらないとのこと。希望出生率1・8には近づきませんが、政府が求めているような100年後の日本社会のソフトラディングにはまだ足りない状況です。つまり保育だけでは少子化問題は解決できないということなのです。

選択肢B・・・出産一時金

「じゃあ、子どもが生まれたら多額のお金を給付した

らどうか」、最近そういった提言をする人が出てきています。それをしたら出生率がどうなるかという実証研究があります（田中・河野 2009）。

その研究結果に基づいて私が試算すると、低所得家庭に対して赤ちゃん1人あたり930万円の出産一時金を給付すれば、出生率が2・07まで上がるという計算になります。これには毎年3・9兆円がかかります。また、この試算は下位50%の低所得家庭の赤ちゃんにだけ930万円を給付するという最小限の場合で、それだと半分の赤ちゃんだけが恩恵を受けますので、世論の反発は大きいでしょう。そこで、高所得家庭にも多少給付するようにすると、6兆円ぐらいいかることになります。そのぐらいいの規模でやって、ようやく出生率が2・07まで上がるという計算になります。

また、出産一時金はインパクトがあつて少子化対策としては効果があるかもしれませんが、お金目当てで産む人が出てくれば、育児放棄の問題が生じかねません。子どもの人権や幸福、発達、そして将来の社会の質を考えると、一時金の案は問題があると思います。

選択肢C・・・働き方の柔軟化、高等教育学費軽減、待機児童解消

ではどうしたらいいかというところで、私は三つの政策を提言しています。「働き方の柔軟化」と「高等教育の学費軽減」、そして「潜在的待機児童の解消」です。全体的にまとめると、「ゆとりを増やしましょう」ということになります。

まず、「働き方の柔軟化」というのは、主には「労働時間を減らしましょう」ということです。私の分析によれば、実はこれが一番効果があり、出生率が一番大きく

少し、定常化するという推計になります。この定常化した後の高齢化率は、実は現在の高齢化率とほぼ同じなので、日本政府としては、今と同じ程度の高齢化率であれば何とかやっていけるのではないかと、という目論見のようです。こういうことから、2045年前後に出生率2・07、というのが一つの目安になっているわけです。ただ、現在の出生率は1・3です。希望出生率の1・8ですらまだ全然実現できておらず、2・07となるとさらにハードルが高い。また、実はこれまで政府が発表してきた出生率の将来予測は甘すぎて外れることがほとんどだったので、その甘い予測に基づいての目安でしたので、実態としてはもっと深刻な問題になるといえます。

「2045年に出生率2・07」を実現するには

必須・・・共同養育

では、この「2045年に出生率2・07」を実現するとすれば、どういった政策が必要なのか。目標が高すぎることで、データや研究が乏しいということで、これまであまり論じられてきませんでした。可能な範囲で、既存のデータ・研究、私の推計によって試算しました。まず必須と思われるのは、共同養育です。核家族化によって孤立しがちな育児を、親がほかの大人たちと一緒にやることで、育児放棄などの虐待を予防していくことが大事です。夫の家事育児、祖父母の手助けというのがあります。一人親家庭だったり祖父母が遠方なこともあります。ですので、誰もが使えるべき共同養育の制度として、保育・幼児教育が重要になります。

伸びると推計されます。ただ、実際にはそんな簡単にできることではなく、フランスや北欧は何十年もかけてIT化などを進め、無理なく労働時間を短縮し、ワークライフバランスを進めて、子育てと両立しやすい社会を作ってきました。それだからこそ、出生率が2に近い高いレベルに回復しています。もちろん他の対策もされていますが、基本的には働き方が一番の要因ではないかと、データ推計から見えています。

次に「高等教育の学費軽減」ですが、すべての大学生・専門学校生の学費を、年間60万円ぐらいい軽減することによって、少し出生率が上がるという推計ができます。

最後は「潜在的待機児童の解消」です。今、「潜在的」な待機児童はほぼいなくなりつつありますが、私が問題視しているのは「潜在的」な待機児童のほうです。「すぐ子育てが大変だ、人手が欲しい、でも一人で抱えている、このままじゃ虐待をしてしまいたい」というお母さんはいっぱいいます。そういう人は、保育利用のニーズが潜在的にあるのですが、今の制度では、保育を使えない場合が多いです。基本的に、一定以上働いていないと保育を使えません。なので専業主婦は保育を使えないのです。そのように保育を使いたいのには保育の申し込みができます。その20万人の潜在的な保育ニーズを満たすために、保育定員を増やすとすれば、0・3兆円ぐらいいかります。またそのためには、専業主婦でも保育を使えるように、保育利用条件を緩和することも必要になります。このような保育定員の拡大によって、出生率は少しだけ上がる見込みです。

これら三つの政策を組み合わせると、出生率は2・07まで上がるだろうと私は試算しています。

労働時間、高等教育費、子育て支援予算の実状

「働き方の柔軟化」「高等教育の学費軽減」「潜在的待機児童の解消」という三つの政策が重要だろうということとを、内閣府の「選択する未来2・0」という会議（第2回、2020年）での講演で提言したところ、その直後に骨太の方針が発表されました。財政諮問会議での参考資料の中にこの提言も紹介され、それを受けて内閣府はこの三つの政策が現状どこまで進んでいるのかを検証しました。

「労働時間」については（図6）、日本の場合それなりに減ってきてはいますが、ドイツやフランスと比べると明らかにまだ長いということがわかります。特にフランスは一時期、非常に少子化が進みましたが、今は比較的孩子を産みやすい社会になっています。フランスは非常に働き方に関して厳しいといいますが、家族との時間

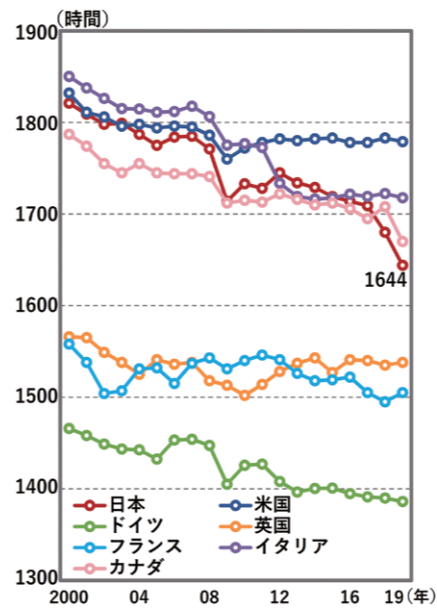


図6 年間労働時間の推移
内閣府「選択する未来2.0 報告参考資料」2021年6月4日

を大事にすることはよく知られていることで、まさにそれを表すデータかなと思います。ドイツも最近だいぶ労働時間が削減されて、出生率もようやく回復し始めたところ、各国とも「ゆとりづくり」を頑張っているところなのかなと思いますね。生きやすい「ゆとりのある社会」にしていきたいと、子どもを産みたい気持ちばかりにくだいでしょう。

昔もゆとりはありませんでしたが、子どもは多く生まれていました。それは価値観として、子どもを産まなくちゃいけないという義務感が非常に強かったからですね。また、三世同居や地域のつながりがあったりと、共同養育がやりやすい状況でもありました。それが、今は核家族化や移住の増加によって、子育てが孤立しがちになり、共同養育がしにくくなった。そのため、なかなか産みづらい状況になっています。せめて夫婦両方の長時間労働がなくなると、出産・育児は難しい。

次に「高等教育」についてですが、図7は高等教育に対する公的支出と私費負担です。日本を見ますと、大学生一人当たりの公的支出は年間60万円ぐらいに対して、家計負担が年間107万円です。とりわけ私立大学生の場合は、家計負担が年間120万円もあるもので、非常に大変な状況です。国立大学生への公的支出はスウェーデン並みに多いですが、家計負担も50万円強あるので、やはり家計負担は北欧やフランスと比べると格段に大きい。

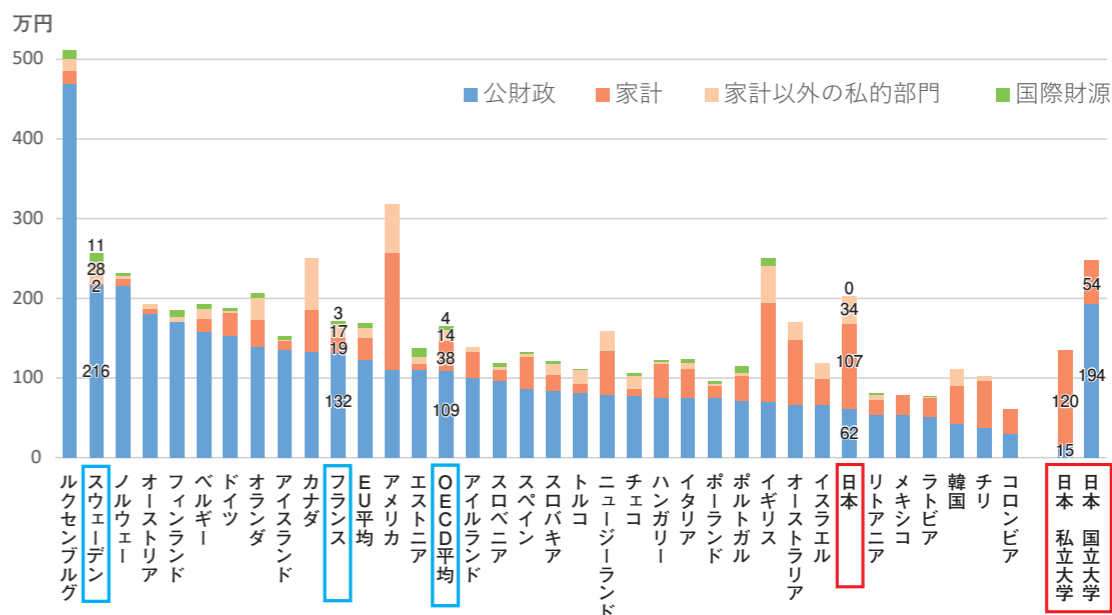


図7 高等教育機関に対する学生1人当たり公的支出と私費負担（年間）（2016年）

日本私立大学団体連合会「令和3年度予算要望（データ編）」2020年9月より改訂

わけです。大学生の8割は私立大学生ですから、全体で見ると非常に家計負担が大きいことがわかります。フランスやスウェーデンといった少子化を克服しつつある国では、基本的に家計負担はほぼありません。そういったところからも、日本は高等教育の家計負担がいまだに課題だと思えます。

最後に「保育」についてです。保育の予算は、安倍政権以降、待機児童解消に力を入れたため増えました。とはいえ、保育を含む子育て支援全体の予算を見ると、GDP比の2%程度で、フランス3%、スウェーデン3.5%とは、1%以上の大きな差があります。今後、「子ども家庭庁」ができることで、子育て支援予算をどこまで増やせるかというのも注目すべき点です。

財源をどうするか

労働生産性の分析もしたところ、これら三つの政策のいずれも、労働生産性にとってプラスであると推計されました。経済的なプラスも確保したうえで、ゆとりのある社会、生きやすい社会、子育てしやすい社会にしていきたいというのが大事ではないかという提言を、各所でしてきました。岸田首相は、子ども家庭庁についての国会答弁で、「子育て支援予算を倍増させる」、つまりGDP比で約1%以上、5兆円以上増やすことをめざすと述べています。私の提案する三つの政策すべてを合わせると、必要な追加予算は4.4兆円ぐらいですので、5兆円に収まります。

ではその財源をどうするか。ここは私の専門外になつてしましますが、先進諸国の時系列データを使って分析したOECDの報告書によると、さまざまな税のな

かで資産課税が最もGDPへの悪影響が小さいという結果が出ています。資産を多く持っている方々から税を徴収することによって、その税収が社会に還元されるだけでなく、資産が売却されやすくなることで社会に流通して有効活用されるようになるでしょう。ですので子育て支援の財源としては、もちろん国債などもありえますが、税で財源を確保するならば、資産課税を少しずつ増やすことが最適なのではないかという提言をしています。

幸せな社会にしないと子どもは増えない

ゆとりがあつて生活しやすい、幸せに生きられるような社会にしていけないと、「自分の子どもを持ちたい」「子どもを産んでこの社会に迎え入れたい」という気持ちにはなかなかかなえないと思います。今は価値観が個人主義化している中で、人々は基本的に「自分のため」に産むわけですね。でも、ゆとりのある幸せな社会でなければ、そんな社会で産んでも自分のためにならない。自分の生活がいっぱいいっぱいであるそんな社会で、子育てなんてとてもできないと考えるのは当然でしょう。また、そんなしんどい社会に子どもを招き入れるのは申し訳ないという気持ちもありうるでしょう。このように個人主義化した社会では、幸せな社会にしないと子どもは増えない、ということが根本的なポイントだと思っています。

柴田 悠
Haruka Shibata

社会学者。京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門分野：幸福研究、社会保障論、近代化論。1978年生まれ。京都大学総合人間学部卒業、同大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。同志社大学准教授、立命館大学准教授を経て、2016年度より現職。著書に『子育て支援と経済成長』（朝日新書、2017年）、『子育て支援が日本を救う—政策効果の統計分析』（勁草書房、2016年、社会政策学会賞受賞）など。

PROFILE

2023 年度 研究助成の募集

募集分野



ひとの健やかで心豊かな未来を実現する研究
若い研究者による意欲的な研究
SDGs につながる研究を助成します

採用実績のある方の再チャレンジもお待ちしております

募集
期間

2023 年 **4 月 1 日** ~ **4 月 30 日**

- **研究助成金**
1 件につき 20 万円 ~ 100 万円 (2022 年度 14 件採用)
- **研究期間**
2023 年 9 月 ~ 2024 年 8 月末までの 1 年間 (研究期間は原則 1 年間とします)
- **応募資格**
日本国内において上記テーマに関する研究を行う人
- **選考結果通知**
2023 年 7 月上旬に採否を申請者全員に書面で通知します。
- **助成金交付**
2023 年 8 月より交付します。
※営利目的の研究には助成できません。
※個人への交付はできません。団体・組織に限ります。

詳しい内容は財団のホームページでご確認ください。
(<https://www.jnhf.or.jp>)

2022 年度 研究助成採用結果

分野	氏名	所属	研究課題
食品	みたに たかかず 三谷 壘一	信州大学大学院 総合理工学研究科	加齢によるインスリン抵抗性を改善するための機能性食品の開発
	おやなぎ 小柳 えり	川崎医療福祉大学 健康体育学科	食用サボテンの腸管バリア維持機能および自然免疫機能に及ぼす影響
環境	ながの まりこ 永野真理子	京都先端科学大学 バイオ環境学部	水田生態系における多種共存の解明
	みずかみ しょうご 水上 象吾	佛光大学 社会学部	都市住宅地域の空き地は緑視率を向上させ地域社会に寄与するか？ —都市社会学・社会病理学・メンタルヘルスの重層的調査—
医学	よしみ あきひで 吉見 昭秀	国立がん研究センター研究所 がん RNA 研究ユニット	スプライシング異常を標的にした次世代がん治療法の展開
	おぐり やすお 小栗 靖生	京都大学大学院 農学研究科	熱産生脂肪細胞の誘導因子の探索と予防医学への応用
	くまがい しょうご 熊谷 尚悟	国立がん研究センター 先端医療開発センター	非アルコール性脂肪性肝炎関連肝細胞癌が発癌過程で備える免疫逃避機構の詳細解明
	おりうち のぼる 織内 昇	福島県立医科大学 先端臨床研究センター	RI によるがん治療の効果と安全性に関する研究
	くどう かい 工藤 海	東海大学 医学部	EBV 感染により覚醒する新規脂肪酸不飽和化酵素の同定とその医療展開 を目指した基盤構築
	さとう かずひで 佐藤 和秀	名古屋大学大学院 医学系研究科	体内をくまなく照らすことができる生体光照射デバイス開発と臨床応用
	にしたに なおや 西谷 直也	金沢大学 医薬保健研究域薬学系	ネット・ゲーム依存の治療法開発を指向した行動嗜癖モデルマウスの確立とその病態メカニズムの解明
福祉	いがらしまさき 五十嵐正樹	東京大学医学部附属病院 糖尿病・代謝内科	代謝栄養シグナルによる味蕾幹細胞制御機構解明とその味覚障害への応用
	こじま なおこ 小島 直子	株式会社アンデコール 東京家政大学	重度の身体障害児・者の成長過程における生活空間とケア環境の課題の抽出とその環境改善のあり方の検証 ~ライフステージにあわせた安全・安心で快適な暮らしをつくるためのアセスメントシートづくり~
	たかむら そういち 篁 宗一	静岡県立大学 看護学部	ネット社会による孤立・依存を予防するプログラムの開発

助成件数 : **14 件**
助成金総額 : **1,300 万円**

ひと・健康・未来研究財団は、
熱意あふれる研究者を
これからも応援してまいります。

ひと・健康・未来 インフォメーション

『ひと・健康・未来シンポジウム』のご案内

ひと・健康・未来シンポジウム 2023 京都

和食の未来 —外から見た和食、内から見た和食—

日 時：2023年2月11日（土・祝）13:00～16:30
場 所：京都市リサーチパーク サイエンスホール（京都市下京区）

対面
オンライン
同時開催

講演 1 「グローバル化する和食」
赤嶺 淳 一橋大学大学院社会学研究科 教授

講演 2 「外から見た和食」
アイスン ウヤル楨林 同志社大学グローバル地域文化学部 准教授

講演 3 「内から見た和食 —江戸期京商家の食のならわし—」
杉本 節子 公益財団法人奈良屋記念杉本家保存会 理事
料理研究家



コーディネーター 末原 達郎
公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 理事
京都大学名誉教授・龍谷大学名誉教授

申込方法

必要事項を記入の上、以下の方法でお申込みください。事務局より「受付完了」を返信します。

- ① 会場参加（定員 100 名） → 電話、FAX、メールでお申込みください。
- ② オンライン参加（定員 500 名） → メールでお申込みください。

必要事項 参加方法（①、②どちらか）、お名前／ふりがな（複数の場合は全員分）、連絡先
※新型コロナウイルス感染状況によっては完全オンラインになる可能性があります。

申 込 先／公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 事務局
電話 & FAX：075-212-1854 E-mail：hitokenkoumirai@jnhf.or.jp

受付期間／2022年11月21日（月）～2023年1月31日（火）
定員になり次第受付を締め切ります。

後 援／和食文化学会・京都府・京都市・京都市教育委員会・京都市社会福祉協議会・京都新聞



QRコードから
お申込
いただけます

vol. 32 2022. 11 編集後記

機関誌第32号をお届けします。

今回は、新企画「ポストコロナにどのような未来を築くか」の第2回として、辰巳理事が、「触る」を取り戻す」をテーマに、座談会を企画されました。コロナ禍で非接触が当たり前になりつつあるなかで、改めて「触る」ことを問い直した座談会になっています。

スペシャルインタビューは、料理家の栗原はるみ氏です。2022年6月16日、自宅で実施しました。さもないことに手間暇をかけることが身体化され、それが一つの型となり、人生を愉しむ達人のようになっています。

未来研究会の報告は、2022年7月22日にハイブリットで開催された柴田悠氏の「日本の少子化問題—課題と解決策—」です。急激な人口減少に対して、働き方の柔軟化・高等教育学費軽減・待機児童解消を2045年までに実現することを、独自の試算によって提示されました。

コラムは、末原理事に代わって、塩田理事長が担当されます。ご期待ください。

コロナ禍の長期化、ウクライナへのロシアの侵攻は、地球社会に大きな影響を及ぼしています。地球環境への関心も、日々の生活に追われるなかで後退しているように思えます。われわれは、どのような未来を築こうとしているのか。機関誌を通して発信していきたいと思えます。

編集委員長 理事 島中 宗一

ひとと健康と未来と —財団の窓から—

コラム 第1回

パンデミックを超えて

3年以上にわたる新型コロナウイルス（COVID-19、SRS-CoV-2）の拡がりによって、世界中が深刻な影響を受け、社会全体が閉塞感に覆われています。また、異常気象や食糧危機、重大な国際紛争、貧困や格差拡大などの問題が頻発し、地球環境と人類の生存が危機に瀕していると言っても過言ではありません。人類の叡智を結集して問題を解決し、豊かな地球環境と生態系を将来に残す努力をすることが、いま喫緊の課題になっています。国連サミットでは、2015年に「持続可能な発展のための目標（Sustainable Development Goals: SDGs）」が採択されました。これは、人類がこの地球上で暮らし続けていくために2030年までに達成すべき目標を定めたもので、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動などを解決し平和な社会を実現するための17のゴール、169の具体的なターゲットが設定されています。

「ひと・健康・未来研究財団」は、豊かな社会と未来を実現するため、食と健康、予防医学、環境、こころ、家族などに関連する諸課題の解決を目的とする公益財団法人で、前身の「財団法人慢性疾患・リハビリテーション研究振興財団」から名称を変更し、公益認定を受けて2011年に発足しました。財団の名称は、初代理事長故菅原努先生（京都大学名誉教授）の命名によるものですが、まさに21世紀における人類の課題を見据えた先見性のある名前であり、我々も誇りにしています。財団の活動は、研究調査、研究助成、講演会やシンポジウムの開催、機関誌「ひと・健康・未来」による情報発信を中心とし、人々の心身の健康の増進や生活の質を向上し、豊かで幸福な社会を実現するための活動を行っています。財団の運営には、食品科学、医学、薬学、生

物学、人文・社会科学など幅広い分野で指導的な立場にあるメンバーが当たり、さまざまな議論をして学際的な企画を練ります。財団の財政は、三基商事株式会社様の全面的なご支援を得ており、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

長期間にわたるコロナ禍のために、当財団の活動も大きな影響を受けてきました。毎年2～3回、市民を対象に行っているシンポジウムは3年間にわたって開催できない状況が続いており、大変残念です。本年9月にシンポジウム2022福島「『食』を考える—今の食卓に大切な栄養学 Part2—」を企画し鋭意準備を進めてきましたが、コロナの第7波が収束しないため、止むなくオンライン開催とさせていただきます。講演の内容は、追って機関誌に掲載させていただきます。また、研究助成の成果発表会も、ここ3年はハイブリッド開催を余儀なくされています。貴重な研究発表と交流の機会ですので、是非とも早くface-to-faceで実現できることを願っています。

未曾有のパンデミックを経験して、我々の価値観、世界観が少なからず変化し、一人一人の今後の生き方にも影響するはず。特に、人生の重要な時期にコロナ禍という異常事態に遭遇した若者たちの苦難は、想像するに余りあります。財団で開催した座談会シリーズ「ポストコロナにどのような未来を築くか」第1回（機関誌31号）では、大学生諸君がこの困難な状況を嘆くだけでなく、一人一人がこれを糧にして将来への前向きな発想を抱いていることを知り、勇気づけられました。未来を担う若者達に期待し、パンデミックの先に新しい社会が開けることを願っています。



Profile

しおた こうへい
塩田 浩平 公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団 理事長
京都大学名誉教授・滋賀医科大学名誉教授

1946年三重県生まれ。京都大学医学部卒業。国立遺伝学研究所研究員、米国ワシントン大学客員研究員、ベルリン自由大学客員教授、京都大学医学部助教授、教授等を経て、京都大学医学研究科長・医学部長、京都大学理事・副学長、国立大学法人滋賀医科大学学長を歴任。ヒトの発生学、先天異常の成因・発症機序・予防について研究。著書に「Color Atlas of Clinical Embryology」(Saunders、共著)、「人体発生学講義ノート」(金芳堂)など。